

拒否戦線

プロレタリア国際主義万才
世界共産主義革命戦争勝利

拒否戦線 VOL. 1

☆目

次☆

第1章 日本赤軍と我々	3
はじめに	3
Ⅰ、日本赤軍出生の歴史的根拠	5
Ⅱ、日本赤軍の闘いとパレスチナ革命運動	9
Ⅲ、我々の現在の位置とそして任務	15
第2章 国際共産主義運動の現段階（略）	19
第3章 日本革命と当面する我々の任務（略）	19
第4章 パレスチナ・アラブ革命の現段階	20
はじめに	20
Ⅰ、帝国主義の世界的権力再編＝「中東和平」 策動の侵略反革命	23
Ⅱ、パレスチナ・アラブ革命を圧殺するジュネ ーブ会議開催「ミニ・パレスチナ国家」案	33
Ⅲ、PFLPの革命戦争路線と我々	40

「拒否戦線」発刊にあたって

一九七二年五月三〇日―我々はこの日を世界革命の輝やかしい一ページとして決して忘れることはできない。それは日本赤軍とPFLPの共同作戦として、岡本、奥平、安田三戦士によってデイルヤン作戦―テルアビブリッダ空港闘争が貫徹された日である。

プロレタリア世界革命―世界共産主義を最後のに戦取せんとする革命戦士にとって、日々の闘争は例え不十分なものであっても、世界革命へ向けて着実に刻印されていくものである。デイルヤン作戦はその最も確実な一段階であった。

革命戦士が前進せんとする時、ブルジョワジーとその手先は、あらゆる手段を用いてもそれを阻もうとする。デイルヤン作戦を貫徹した日本赤軍に対しても、各国帝国主義―ICPO（国際刑事警察機構）は日本赤軍を第一級の国際犯罪者としてデマゴギーを流し、弾圧に奔走している。しかし、パレスチナ―アラブ人民の民族解放に向けた要求に応え、階級攻防の必要に応え闘っている日本赤軍は、少なからぬ不充分性を、人民に学び、闘争、実践の中で打ち鍛えられながら、あらゆる妨害を跳ね返し前進しているのである。

世界の動向は現在、米・ソの覇権争奪を軸に、ますます戦争の危機が高まっている。それはベトナム、インドシナ人民の民族解放革命戦争の勝利的前進に象徴される、全世界の労働者、被抑圧人民の階級的昂揚と、それに恐怖した帝国主義、社会帝国主義、各国反動派が、ファシズムを準備し、闘う人民に襲いかからんとしているからである。シオニズムイスラエルにおいても、極反動派のリード、ベギン政権が登場し、各国アラブ反動派を挑発し、闘うパレスチナ人民を圧殺せんとしている。我々に、こうした直接的、暴力的圧殺

と同時に、中東和平策動、ミニパレスチナ国家建設としてある間接的、偽瞞的圧殺攻撃をも暴露し抜き、これらと非妥協的に闘っているP.F.I.Pを始めとした「拒否戦線」と固く連帯し、パレスチナ、アラブ人民の解放に向け闘っていかねければならない。

パレスチナ解放に向けた我々の国際主義的任務は自国帝国主義打倒である。こうした我々の主体的任務を鮮明にしつつ、混乱しつつあるプロレタリア国際主義の内実を明らかにしていかなければならない。

「プロレタリア国際主義はプロレタリアートのイデオロギーであり、革命の勝利と共産主義建設の最も強力な武器の一つであり、条件の一つである。プロレタリア国際主義は不可分の全体であつて、修正主義者が主張しているように、ソ連のそれ、イタリヤのそれ、ユーゴスラビアのそれ、フランスのそれなどといったいく種類もの国際主義は存在しない。」実際の国際主義は一つしか、ただ一つしかない。」(エンベル・ホッジャ)

この、ただ一つしかないプロレタリア国際主義の旗を鮮明にし闘いを準備することが問われているのである。すなわち、全世界の労働者、被抑圧人民と連帯し、自国の他民族侵略、抑圧を許さず、自国帝国主義を打倒し、プロ独―社会主義革命を戦取していくことである。

そうした革命事業の重要な一環として、アラブ拒否戦線、日本赤軍の同志友人達との連帯の下に「拒否戦戦」を発刊し、日本労働者階級にプロレタリア国際主義の内実を鮮明にし、国際的な革命戦線を構築していくことは緊要の課題であると考える。

全国で闘う労働者、革命戦士の同志、友人に、このパンフが闘いの武器の一つになれば幸いである。全世界を獲得するために、隊伍を強化し、共に前進していく。

第一章 日本赤軍と我々

はじめに

現下、日本階級闘争は、帝国主義、社会帝国主義と拮抗し対峙する多くの諸課題を含みつつも、ブルジョワ独裁権力に確実な一撃を加え得る次の一步を踏み出す道を模索している段階である。それは一つには日帝ブルジョワジーが労働者、農漁民大衆に対してかけているところの様々な差別・分断―抑圧攻撃の根幹をなす、いわば綱領の原則的部分に対する展開の曖昧性故に、綱領の歴史的部―現代帝国主義の侵略抑圧反革命の結果現象に対して自然発生的民主主義闘争は展開しえても、資本主義の生産関係そのものを解体しプロレタリア独裁―社会主義革命を展望する道を展開しえていないからである。更にそうした階級の任務、即ち綱領―組織―実践を統一的に貫徹し抜く共産主義者、プロレタリア革命党の決定的な立ち遅れがある。

その結果、三里塚闘争においても五月六日の岩山大鉄塔抜き打ち撤去、五月八日の東山君虐殺を頂点とする日帝―警察権力の暴力的、ファッショ的圧殺攻撃に対して、トロ

ツキズム、第四インターの諸君を初めとした小ブル急進主義者が即物的憤激でもって一定の突撃を敢行しながらも、ブルジョワ独裁権力に肉薄するに至らず民主主義経済闘争の枠内に留まっていたにすぎない。

我々に問われているのは、個々の闘争を確実に闘っているのもよりのこと、個々の闘争を貫いているところの資本主義生産関係そのものをぶちこわし、ブルジョワジーの墓掘り人であるプロレタリアートの社会を構築していくプロ独―社会主義革命を確実なものとして戦取していくことである。まさに革命は権力問題なのだ。

我々はこうした問題意識を鮮明にしつつ、我々の出生の母胎である共産主義者同盟の総括を媒介に、本パンフの眼目である世界革命―プロレタリア国際主義の立場を明らかにしていかなければならない。それは、例えば現下の三里塚闘争においても、三里塚空港開設が日本帝国主義の朝鮮―アジア侵略反革命の前線基地として、文字通り軍事空港として開設せんとする日帝ブルジョワジーの野望を打ち破く闘いとして、「他民族の抑圧、侵略を許さない」プロレタリア国際主義を持ちえてこそ勝利しうるからである。現在の日本階級闘争は、ベトナム革命と連帯しつつ闘い抜いた六〇年代後半の闘争展開によって一定勝ち取っていったプロレタリア国際主義の立場が連合赤軍の敗北、ベトナム

革命の勝利に捧臨すること等によって希薄になり、またまた「一國主義の泥沼に陥る傾向を多分に持ったものであることを看破するならば、我々のこの作業も、多くの意義をもつものであることは明らかである。」以下、主に日本階級闘争—BUND、赤軍が生み出した国際部隊—よど号ハイジャック九人の戦士、とりわけパレスチナにおける日本赤軍と日本階級闘争との関係性を軸に、現下の国際的責務を明らかにしていきたい。

I、日本赤軍出生の歴史的根拠

「国境」そのものが産業資本主義以来、国民的生産力を媒介にブルジョワジーが搾取と抑圧の構造として、文字通り人為的に作られ線引きされてきたものならば、「国境と階級」という運動（日本赤軍）は労働者、被抑圧民族の当然の闘いとして措定される。元来、「国境」はエンゲルスの「家族・私有財産・国家の起源」をもち出すまでもなく、階級の発生史以降、支配の道具としてあるのだ。

こうした基本的な支配構造を突破する闘いは日本においても多くの例をみるけれども、戦後、中南米ゲリラ、ベトナム民族解放闘争における日本人の参加など、いわゆる義勇軍の参加を別として、最も組織的、意識的に登場したのがアラブ赤軍—日本赤軍である。（以下、赤軍派在アラブ支部、アラブ赤軍、日本赤軍等として名称変化はあるけれども、特別な場合を除いて日本赤軍と呼称する。）

日本赤軍が紛れもなく、共産主義者同盟赤軍派を母胎に日本階級闘争の延長上に登場したものであり、その意味では様々の義勇軍とは別にその出生の根拠を明らかにしていく必要があるだろう。

a、共産主義者同盟とプロレタリア国際主義

共産主義者同盟（BUND）は五八年日本共産党から訣別し登場した。日「共」の一國社会主義に対して世界革命を、平和共存—議会議会主義に対して暴力革命を、そして二段階革命に対して一段階革命即ちプロレタリア独裁・社会主義革命を対置したのがその政治路線である。こうした原則的正しさ、優位性を持ちながらも、政治路線においては日帝自立論の限界として世界の有機的関連性を明らかにしえず、思想路線においては宇野、黒寛等の雑炊であり、その階級基盤は小ブル学生であるという限界を持っていたが故に、六〇年安保闘争の全人民的昂揚の最先頭で闘い抜く中で玉碎的に分解していったのである。

プロレタリア国際主義の立場が一定明らかになったのは、六六年第二次BUNDの再建の中でベトナム民族解放闘争と結合した、六七年一〇・八羽田闘争を「組織された暴力とプロレタリア国際主義」として総括しきった段階からである。第一次BUNDは日帝自立論から日帝打倒に切り縮められ、アルジェリア革命を一定評価しつつも、民族解放闘争を世界革命と連関させ位置付け結合することはできなかった。反帝反スタ潮流の裏切り史観者達は言うまでもな

く、現在に至るまで民族解放闘争、プロレタリア国際主義を理解しえず、小ブル的な反戦闘争や血償の思想をわめくに止まっている。第二次BUNDの相対的正しさと優位性は民族解放闘争との結合と社会主義国、中国、ベトナム等の評価、総じて国際主義の立場を持つに至ったことである。

「組織された暴力とプロレタリア国際主義」の総括過程で、第二次BUND結成当初、理論的に領導してきた岩田危機論―日帝フンズマリ論からくる「一国―アジア―世界革命」(三段ロケット論)の先進国革命論者―マル戦派が脱落し、後に「過渡期世界論」として体系化される三プロク階級闘争―世界同時革命派が主流となってくるのである。こうした政治路線に基いて展開されたのがBUND七回、八回大会であり、六八年八・三国際反戦集会であった。

b、共産主義者同盟赤軍派とプロレタリア国際主義

六八年八・三国際反戦集会の基調論文(八・三論文)第一章こそ後に一向過渡期世界論として体系化され、赤軍派の理論的根拠としての「世界武装プロレタリアートと攻撃型階級闘争」を展開したものであり、第二章仏徳二の「三プロク階級闘争論」、第三章旭凡太郎の論文とともに一つの歴史的文書であった。この時の組織路線は「国際共産

主義インター協議会」―第三潮流としての第五インター創設であった。

しかし八・三集会、第八回大会によって世界性と軍事性を打ち出しつつも、「世界性と一國性の矛盾」「階級性と軍事の矛盾」を突破しえず、反戦―全学連の最左派の指導という位置に止まり、六九年東大闘争、四・二八闘争の政治局の無指導によって一挙に党内矛盾は爆発し「赤軍派」の登場となったのである。赤軍派は「デモよりも大きく蜂起よりも小さい」大衆の高度の自然発生性を過大評価しつつ、「世界性と一國性の矛盾」を克服するものとして世界党―世界赤軍―世界革命戦線の組織陣型を提起し、「階級性と軍事の矛盾」に対しては「赤軍」建設をもって克服し、前段階蜂起から世界革命戦争という行動方針を提起していったのである。

ここでは赤軍派の歴史を叙述するのが眼目ではないので、詳細は別に譲ることにし、日本赤軍登場に筆を進めることにしたい。

六九年秋から安保大会戦に向けた赤軍派の登場は日本階級闘争に大きな衝激を与えた。中核派は小ブル急進主義と人民戦線路線との間で動揺し、BUND内右派は反戦―全学連の量的拡大という右翼日和見主義をますます鮮明にし、中間派は党を守れを合言葉に組織維持に陥込んでいった。しかし、「言ったことは必ずやる」ということを党派性と

じつやも、大阪戦争、東京戦争そして大菩薩の五三人逮捕という壊滅的敗北で露呈されたように、その階級基盤が小ブル学生であり、「共産主義と労働運動の結合」という資本主義の生産関係を粉砕するという基本的問題の欠落と軍事の主観的もてあそび、戦闘団主義という限界の中で、六九年秋前段階蜂起は挫折していくのであった。

六九年秋敗北は「七〇年前段階蜂起―国際根拠地建設、国際地下活動、蜂起の軍隊建設」として総括され、それに基づいて淀号H・J闘争が貫徹されたけれども、それ自体、国内では軍事訓練ができないという即時的表現として極めて召還主義であり、コスモポリタニズムの傾向であった。しかしこの闘争によって否定的な契機ではあったけれども始めて民族解放闘争、毛沢東思想等に出会うのであった。

七〇年H・J闘争の貫徹、その後の塩見、高原を始めとした連続的な幹部の逮捕によって、いわゆる第二次綱領論争が開始され、一定の路線転換がなされるのである。

赤軍派在アラブ支部即ち日本赤軍はこの第二次綱領論争の中で形成されてくるので、少し詳しくこの論争を展開してみよう。

c、第二次綱領論争と日本赤軍

第二次綱領論争は、七〇年前段階方針破綻、幹部の連続逮捕という主体的条件と、①ベトナムから全インドシナへの戦争拡大、中・朝・ベトナムの社会主義革命の前進と反米統一戦線の形成、②日米共同声明の実質化―朝鮮侵略反革命と戦争に向けた帝国主義的再編、治安体制強化、③日帝ブルジョワジーに買取されての帝国主義労働運動の伸長と日「共」の更なる修正主義という客観的条件の中で展開された。その内容は、赤軍パンフNo.4の批判的総括として始まり、「戦略なき戦術主義」「党建設なき戦術主義」として、即ち「パンフNo.4は共産主義者の能動的実践を措定しえず、”プロレタリアートの高次の自然発生性”を共産主義運動の歴史的総括を通して把えていず、”革命的敗北主義”による党建設(前蜂―党)として、党を自然発生性に溶解させる下からの党建設」として批判している。

しかし、この段階でも「共産主義と労働運動の結合」、いわゆる資本主義批判がすくばりと抜け落ち総体として急進民主主義の内容である以下のような方針が提出されるのであった。a、世界的持久戦の昂まりと世界革命戦争の即時的对峙段階への移行、b、党―軍―革命戦線の陣型構築とこの陣型の内部規律としての過程的共産主義の実現、c、戦略的持久戦と戦術的即決戦として、即ち具体的には世界武装プロ論を陣型構築の問題に変え、前段階蜂起を連続蜂

起りゲリラ戦の開始に、そして国際地下組織建設を国際ゲリラ闘争の貫徹として、先進国革命戦争―P 国家の根拠地国家化―後進国革命戦争との戦略的呼応をなしていくというものであった。こうした内容から赤軍派在アラブ支部が形成され、国内的には建党―建軍―遊撃戦に突入していくのである。

それ以降、連合赤軍から現在に至る赤軍派の総括は別に展開するとして、日本赤軍の発生が第二次綱領論争から始まり、同時に論争過程でアラブへ向ったという歴史的事実の中からその後の国内赤軍派と一面共通する部分と、その反面相対的独自性をもった部分とが存在し、それが現在まで至ってきているということを確認していく必要があるだろう。ただ淀号H・J闘争における「国際根拠地論」が主観的に他民族利用主義、召還主義の傾向をもっていたことを総括し、ベトナム・インドシナ革命の前進に学ぶ事と軌を一にして、パレスチナアラブ人民に、特にPFLP（パレスチナ解放人民戦線）と結合し学んでいくという路線を持って国際根拠地を建設するという姿勢をもって彼、彼女達はアラブの地に向かったのである。

II、日本赤軍の闘いとパレスチナ革命 連帯運動

Iで展開したことが文字通り、日本赤軍前史とするならば、以下、七二年五・三〇テルアビブリッダ闘争に始まった日本赤軍の闘いとパレスチナ・アラブ革命の展開、そしてそれに呼応して展開された日本におけるパレスチナ革命連帯運動を概括的に明らかにし、その一定の総括と現在の課題を明らかにしていきたい。

a、七二年第一次「赤―P」上映隊と連合赤軍

重信同志を始めとした日本赤軍兵士がパレスチナの地へ向かったのは連続M作戦が展開されているさ中の七一年二月であった。赤軍派在アラブ支部の形成は当時の赤軍派中央―森指導部とは相対的独自に準備され実行されていた。それは第二次綱領論争の中で、関西指導部を中心として世界赤軍―世界赤軍―世界革命戦線形成を基軸として世界革命における日本革命の位置を確定せんとする傾向として、関西における赤軍周辺グループ例えは京大バルチザン、日本―キューバ文化交流協会の一部等と呼応しつつ世界に目

を向けていった部分と、M作戦を軸としつつ建党―建軍―遊撃戦を貫徹せんとした中央軍―森指導部との一定の党内闘争があったからである。しかしこの党内闘争は当時「P（要人誘拐）B（国際根拠地建設）M（資金奪取）作戦」として相対化され全面化するには至らなかった。それ故、その後在アラブの赤軍兵士と国内赤軍派の奇妙な連帯と相対的独自の展開として現象したのである。こうした問題が表面化したのは連合赤軍敗北と五・三〇テルアビブ・リッダ闘争貫徹以降、即ち七二年半ば以降であった。

七一年二月パレスチナに向かった赤軍兵士はPFLPと結合しつつ、当初はパレスチナ・アラブ革命に学び、赤軍派の国際路線―世界赤軍―世界革命戦線の陣型作りを課題としていった。それは若松孝二、足立正生同志を中心とした△報道▽と△創造▽の回路―革命ニュース映画として位置付けられた映画「赤軍―PFLP・世界戦争宣言」の製作と赤軍派、PFLP共同編集による「アラブゲリラと世界赤軍」の刊行として七一年一月までに連続的に実行されていた。日本の共産主義者同盟赤軍派とPFLPの出会いには七〇年三月三十一日の淀号H・J闘争と同年のPFLPによる旅客機四連続H・J闘争の貫徹という一方での戦術的共有と、六〇年代後半からそれぞれの歴史的社会的相異はあるものの顕在化したところの世界の武闘派

のゲリラ闘争の全面化であった。PFLPのH・J、米ウ
エーザーマンの連続爆破闘争、ブラックパンサーの市街戦、
中南米の都市ゲリラ同志奪還作戦、カナダFLQの闘い、
スペイン・バスクの闘いとして打ち続き、それらがベトナ
ム革命戦争、朝中―ベトナムの国際根拠地化と結合しつ
つ、ブラックパンサーのエルドリッジ・クリーパーの「世
界解放戦線」の提起へと至った国際武闘派の一翼として日
本赤軍は世界党―世界赤軍―世界革命戦線の陣型構築とい
う路線をもって参加していったのである。

一方、国内赤軍派は七一年春の段階から獄中と外との間
を中心に「七二蜂起か否か」という論争が展開されていた。
赤軍派指導部―中央軍は、七一年一月の「赤軍特別号」に
おいて七二年沖繩返還を帝国主義の軍事外交として敵階級
との攻防環を打ち出し、七二年武装蜂起を提起してきた。

この七二年蜂起路線に対して主要に獄中から猛然とした反
論が巻き起り、蜂起に対する位置付け論争が前年の花園論
文「自由への道」における「蜂起かゲリラか」という提起
も併せて展開されたのであった。獄中の意見は上野、八木
氏を始めとして七二年蜂起を主観主義、非科学的提起、情
勢認識の誤りとして批判するものであった。

しかし、赤軍派指導部は軍事―非合法のリアリティを武
器に獄中部分をリアリティの欠如として批判し大衆的蜂起

た矛盾を敵との関係で克服せず隊内共産主義化論として小
ブル道徳修養主義に陥り総括/同志殺しという悲惨な結末
を迎えたのであった。連合赤軍総括は別に展開するとして、
こうした連合赤軍の路線は口先では国際主義を言いつつも
実際は一国主義、戦闘団主義に普段に陥込み、「赤軍派を
世界の人民戦争の波の着実な相互逆流を通して、戦略的に
主体を構築し、世界党―世界赤軍―世界革命統一戦線の陣
型を構築する」という意志一致の下にアラブ支部建設へ向
かった赤軍兵士に対して何らの援助をすどころか、通信
すらまた責任をもってなしえず、七一年一月をもって音
信不通という状態に至るのであった。こうした国内赤軍派
の普段の一国主義への陥込み―それは連合赤軍敗北後の再
建赤軍、臨総段階においても例外ではなく、それ以降の赤
軍派への不信と焦立ちにつながり、国内におけるバレスチ
ナ革命連帯運動も党主導としてではなく、赤軍周辺グルー
プ、いくつかの国際連帯グループが中心となり日本赤軍―
国内支援運動は赤軍派とは相対的独自に展開されるようにな
ったのである。七二年五・三〇テルアビブ・リッダ闘争
の勝利的展開は日本階級闘争、人民に対して大きな衝撃を
与えながらも、そうした赤軍派の党形成の限界をも一挙に
暴露したのであった。それは日本赤軍をして七二年九月―
アラブ赤軍からのテーゼ」による国内赤軍派批判とその後

準備運動―連続的遊撃戦―七二年蜂起へと進み、七一年八
月日共革命左派との統合―連合赤軍へと至るのである。

こうした赤軍派指導部―中央軍の路線は党―軍一元化を
ますます強め、党―軍―革命戦線の陣型は持ちつつも革命
戦線の切り捨てと中央軍への集中―山岳軍事訓練へ全力を
集中するのであった。そうした中で形成された第一次「赤
―P」上映隊は中央軍との連絡はありつつも、党としての
明確な方針が提起しえず、上映隊赤バスからの赤軍派下車
として相対的独自の道を進んでいくのであった。それは「
人民の軍隊（魚）―人民の海」の陣型創出とハニース映
画VIIプロバガンダII武装闘争の戦略回路の中からの赤軍
建設―バレスチナへの兵士派遣として存在したのである。

b、連合赤軍敗北と5・30テルアビブ・リッダ闘争

連合赤軍が日帝ブルジョワジー権力の重包囲下におかれ
敵に追いつめられている過程であった七一年末に、彼らは
その軍事的突破として八銃によるせん滅戦Vの路線を出し
てきた。それ自体、即目的に敵との攻防関係を暴力革命と
して指定するという内容であり、情勢分析の主観性と武器
のもとあそびによる階級関係―ブルとプロとの原則的対立
―資本主義批判を欠落させたものであった。同時にそうし

の「訣別宣言」にまで至り、更に国内におけるアラブ赤軍
の国内機関の一つである「VZ58」からも「我々はここで
一向過渡期世界論にそうして共産主義者同盟赤軍派に別れ
を告げよう。…赤軍派がその力量不足もあって国際主義
から後退していく中で、いわば我々が共産同赤軍派の国際
部を代行してきたわけであるが、ここできっぱりと共産同
赤軍派に別れを告げよう。我々は我々の道を歩む。不拔の
世界党建設の大道を。」という宣言に至らせたのであった。

こうした不協和音を背景にしながらも、岡本、奥平、安
田の三戦士によるPFLPとの共同軍事行動―ディルヤッ
シン作戦―五・三〇テルアビブ・リッダ闘争は連合赤軍の
「銃撃戦と粛清」という文字通り「栄光と悲惨」の敗北に
よる全体的混迷―百家争鳴の中でかなりの衝撃を与えたの
であった。

ディルヤッシン作戦の位置については、後に譲るとして、
この闘いはそれまでのいわば宣伝―煽動戦としてのパンフ
発行―「赤―P」上映という枠を文字通り「武装闘争こそ
最高のプロバガンダである」というテーゼを現実のものとし
し、同時にPFLPとの共同行動として、日本人として始
めて戦争と国際主義の闘いを現実のものとした戦闘であっ
た。この英雄性、戦闘性、国際性は断固として継承してい
かなければならない。

国内における運動は五・三〇闘争以降、当時再建されつつあった赤軍派東京都委員会の中から、国際部再建を志向しつつ翌六月に「テルアビブ闘争支援委員会」が形成され、救援センター、知識人を中心とした「テルアビブ闘争救援委員会」が形成され、更に旧来から独自にパレスチナ闘争の闘いに連帯していた「赤I P」上映隊、パレスチナ人民支援センター、新左翼社等多くの戦線がそれぞれに声明を発し共同行動の準備を開始したのである。

当時の「テルアビブ闘争支援委員会」は六月結成に当たって次のような方針を提起している。「①情宣活動―あらゆるブルジョワ・マスコミデマゴギーを排してテルアビブ闘争の事実を報告し、反帝・反シオニズム・反アラブ反動派の立場からパレスチナ解放闘争の位置と日本帝国主義の関連を明らかにする。②イスラエルに捕われた岡本戦士の軍事裁判阻止、国内弾圧粉碎、③「赤I P 戦争宣言」連続上映、④学習、討論、⑤全国的なテルアビブ闘争支援、二戦士追悼集会。」

この「テルアビブ闘争支援・二戦士追悼集会」に多くの戦士が合流し、八月一六日京都の地において圧倒的勝利のうち開催されたのである。この集會を契機にテルアビブ闘争支援委員会はパレスチナ解放闘争支援委員会へ、「赤I P 戦争宣言」上映隊はそれを母胎に世界革命戦線情報セ

ンター(I・R・F)に改組し、更に集會に結集したパレスチナ人民支援センター、新左翼社、各反弾圧戦線、学生等と連帯を確認し、「一月パレスチナ週間」の開催に向かっていったのである。

c、七二年パレスチナ週間と日本赤軍の連続闘争

五・三〇闘争から八・一六テルアビブ闘争連帯、二戦士追悼集会、一月パレスチナ週間に至る過程は、いわば宣伝・煽動戦の時期と区分されるであろう。運動参加者もまた多岐に渡っていた。共産同赤軍派の一部、「赤I P」上映隊、パレスチナへの物資援助を中心に担っていたパレスチナ人民支援センター、「序章」「査証」「新左翼社」等の出版情報部分、反弾圧戦線等であり、これらが「あらゆるところから別個に起って敵を撃つ」作業をしつつ、「別個に起って同時に撃つ」作業としてP L Oからの呼びかけによる一月パレスチナ国際週間の現実化へと向かったのである。

一月パレスチナ国際週間は関西、東京を中心に展開され、東京においては一〇団体参加の下に実行委員会が形成され、一月に入ってから法政大を始めとした各別集會、一一・一八パレスチナ革命連帯国際集會、一一・二七

パレスチナ難民救済チャリティコンサートをそれぞれ明大記念館、東横ホールで開催していった。こうした連続行動によって一定の大衆的な宣伝戦を貫徹し抜き、シオニスト・イスラエル打倒、パレスチナ解放の位置を示したのであった。

しかし、パレスチナ解放支援連帯を共通確認し、大衆的宣伝戦という第一期の確認をしつつも、主催主体の多様性から、自民党赤城宗徳が理事長を務める「日本アラブ協会」の一部やアラブ反動派も含む「アラブ連盟」をもその一翼に含めたため、パレスチナ革命の観点が曖昧になり、国連二四二条項における「パレスチナ人民の難民規定」を受け入れるかのような「難民救済チャリティコンサート」を開くなど多くの問題を持っていたのである。

我々は段階的成果はありつつも、革命か反革命かの分岐を曖昧にし、日本赤軍I P F L P と結合する観点を欠落させたこと、一月週間を総括し、大衆的宣伝戦を第一期とするならば、組織的宣伝戦を軸とした第二期に入っていないのであった。それは一月パレスチナ国際週間の東京における呼びかけ団体であった「パレスチナ解放支援委員会、パレスチナ人民支援センター、I R F 情報センター」の三団体を軸とした「パレスチナ革命連帯共闘会議」の結成である。これ以降、この共闘会議を中軸に七五年クアララン

ブル闘争まで各年の五・三〇集會を始めとした集會、デモンストレーション、宣伝煽動戦を展開するのであった。しかし、直截に言えば三団体それぞれ大衆団体ではあるもののパレスチナ解放支援委I 赤軍派、人民支援センターI 怒濤派、I R F I 日本赤軍という背景を持つが故に常に不協和音が存在し、統一機関誌発行、持続的共闘が維持しえず、いわば一日共闘の積み重ねとしての連絡機関の位置しか持ちえなかったのである。

赤軍派(臨総)内において国際部Iパレスチナ解放支援委は、臨総全体が下放路線、経済主義、清算主義を深める中で、最左派の位置を示しながらも、運動主義に陥り、体系的に党内闘争を貫徹することができず、結果的にサークル化していった。人民支援センターは経済主義的な国際評論家の傾向を持ち、P F L P とファタ派の路線の間を動揺するといふ限界を持ち、I R F は小ブル急進主義、ロマン主義の限界を克服しえず、日本赤軍のスポークスマンといふ枠に押し止められていく中で、七四年末頃から全体的に停滞、混迷の時期に入っていくのである。この混迷、停滞の理論的、社会的背景は、七二年連合赤軍敗北によって赤軍派が最先頭で領導してきた日本「革命派」の階級闘争が総点検の段階に入り、七二年沖繩闘争の敗北、在日中朝人民の七・七華青闘告発に象徴される抑圧民族としての日本

左翼の点検、狭山差別裁判の全人民化による部落差別への共産主義者の立場の点検等、文字通り、どの階級に依拠して革命をやるのかが問われる段階に入ってしまったところがあるであろう。沖繩・狭山・三里塚・入管、こうした課題に如何に応えていくのかが当時の日本階級闘争の最重要の問題であったのである。こうした中で「プロレタリア国際主義は「他民族抑圧を許さない、民族の分離・自立の原則」という問題に切り縮められ、世界党・赤軍・革命戦線の陣型構築の課題は後方に押しやられていったのである。七〇年代初頭のこうした階級課題のつきつげは、それまでの日本階級闘争の限界をえぐるものとして実に大きな意義をもつものであり、日本共産主義者の主観主義、急進民主主義をマルクス・レーニン主義で克服する重要な問題でもあった。

日本赤軍はこうした国内状況とは相対的独自に七三年日航日・J闘争、七四年シンガポール・クウェート作戦、ハীগ大使館占拠・同志奪還闘争、七五年クアラルンプール同志奪還闘争を連続的に貫徹し、「日本の同志達へ」普段に檄を飛ばしてきたのである。そして日本赤軍はこうした闘争とヨーロッパを中心とした各国革命派との連帯の中から、自らが持っていたコスモポリタニズム的傾向を克服し、アラブからアジアを、そして日本を射程に入れた戦闘を展開

Ⅲ、我々の現在の位置とそして任務

Ⅰ、Ⅱにおいて極めて概括的に日本赤軍、パレスチナ革命連帯運動の流れを追ってきたが、問題は現在、我々に何が問われているのか、何をなすべきかなのである。共産同赤軍派が連合赤軍総括をめぐって現在プロ革派、ML派、日本委員会、紅旗派、その他のグループに分解し、日本階級戦線にその規定力、影響力を失って数年たつが、我々は赤軍派総括と現在の赤軍系各派分析を通して日本赤軍総括の作業に入り我々の任務方針を確定する作業を始めなければならない。

a、国内赤軍派と日本赤軍

七二年連合赤軍敗北は個別赤軍派だけではなく共産主義者同盟の総括を問うものとして存在した。その意味で綱領「組織―実践全てはわたる総括が必要であった。もちろんこうした総括作業は現在も継続されており、単一のプロレタリア革命党建設をもって初めて一区切りがつくのである。現在の断定は避けなければならない部分は存在する。

開し、我々日本の共産主義者との結合を具体的に求める段階にきたのであった。

なお、この間の日本赤軍の理論展開、文章は、「隊伍を整えよ―日本赤軍宣言―」（査証出版刊）にほぼ収録されているので併わせて参照してほしい。

論争継続中であるということ的前提にしつつ、以下、概括的に国内赤軍派の現状と我々の立場について展開していきたい。

国内赤軍派の分解・混迷は、直接的には連合赤軍の総括をめぐる分岐として存在した。七二年初頭の連合赤軍敗北の後、大菩薩峠事件出獄グループを中心に組織され、三月三十一日「連合赤軍一二戦士追悼集会」を主催すると同時にその後一年有余にわたって赤軍多数派を形成した、いわゆる「臨時総会」派は、大衆に依拠しつつ、一定原則的な運動を展開しつつも、その総括及び路線が清算的、経済主義的傾向をもった雑炊理論であり、巾は持ちながらも基軸を持ちえなかつたが故に、わずか一年有余で分解していったのである。「百家争鳴、団結―批判―団結」といった曖昧な結合環でしかなかった「臨時派」の分解によって、逆に国内赤軍派の分岐はより鮮明になってきたといえるであろう。

それは「清算派、止揚派、教条派」（塩見孝也）という分岐として現象され、その後、内ゲバをも含みつつ党内―党派闘争が展開されるのである。ここでは党内―党派闘争の内容に詳しく立ち入るつもりはないが、この論争は個別赤軍派の論争に止まることなく、共産主義者同盟、ひいては日本共産主義運動の総括、点検をも必然化するものであ

り、相互のレッテルはり、現在のにはそれほど前向きの意味は持ちえなくなっているといえよう。

確かにプロ革派を評して、日本赤軍が「党派政治の利用主義的引きまわし」と批判したように、プロ革派はセクト主義的傾向を持ち、紅旗派は清算主義的傾向を持っていたが、そうした段階に止まることを現下の政治状況、労働者階級は許さなくなっているのである。

特に、既成労働運動指導部（総評、J.C.、同盟等）の更なる右傾化が顕在し、それに抗する労働者階級の昂揚が至る所にみられた七六、七七春闘を経験し、三里塚における強権的な開港策動、狭山差別裁判の上告棄却攻撃等、文字通りの天皇制を軸としたファシズム攻撃を前にした七七年段階において、国内赤軍系各派は真剣に、革命党建設に応える準備を開始せんと思われ、それは自力更生の党建設と平行して、党派再編、革命党建設としての論争の活性化である。我々は、こうした方向を歓迎し、革命の大道に向けて、こうした作業の一翼を担うことを決意するものである。

論争の軸は社帝論争、フォシオム論争、中国評価の問題であるが、こうした戦術論争を基礎づけるものは、資本主義批判に裏付けられた「社会主義と労働運動の結合」の問題であり、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想を如何に

ともあれ、赤軍派の持っていた小ブル急進主義と経済主義をマルクス・レーニン主義で克服し抜き、地下党―地下水脈を形成しプロ独―社会主義革命を獲得する日本共産主義者の任務方針を責任をもって明らかにする作業に急ぎ着手しなければならない。こうした日本に在在する共産主義者の任務を確定し、併せて在外日本赤軍の同志達と同志的党派闘争を貫徹し、日本―アラブ―朝鮮を軸に革命思想実践を相互還流させ、反帝反社帝プロレタリア世界革命で全世界の労働者、被抑圧民族と団結し、世界の共産主義者と結合していかなければならない。我々の出生母胎である赤軍各派の諸同志とも自己批判―相互批判をふまえ、ともに共同討論、共同作業を押し進めていく必要があると考える。

b、日本赤軍と我々の国際的任務

日本赤軍はクアラルンプール同志奪還闘争以降、全般的総括作業に入り、現在も続いている。その内容は未だ全面的には明らかになっていないが、七七年五・三〇アピールとして「人民新聞」に載った内容からも明らかのように現在自己批判―相互批判を通じた「思想闘争」をやっている。闘争を真摯に総括するのは大いに必要だし、決して傲慢になることなく主観主義に陥ることなく点検することは大事

革命党の思想路線として獲得していくかである。こうした課題に応えることが、共産主義者同盟、ひいては日本共産主義運動の総括をなしきることにもつながり、単一の革命党建設に結実する道であるだろう。国内赤軍各派はこうした作業の端緒についたばかりであり、現在のには多くの限界、誤りを持っていることを卒直に認めなければならない。その限界、誤りとは、やはり小ブル急進主義と経済主義として現象している。それは国内赤軍各派が主観的にはどうにせよ、いまだ少なからず持っているし、また我々も克服しえないでいる。それに卒直に気付き、克服せんと意識的に努力し始めたのは、我々の間ではこゝ一、二年のことである。

日本赤軍はどうか。彼らも小ブル急進主義を色濃く持った運動を展開してきたといえる。国内赤軍との連絡、論争も保障されない中で、P.F.L.Pとの連携の下に英雄的な闘争を展開してきた日本赤軍は、それ故日本労働者階級と結合しえないまま、いわば義勇軍的な限界を持ち続けてきたのである。その総括の観点を「五・三〇アピール」として人民新聞紙上に明らかにしてきたが、それは逆に極めて清算主義的内容になっているといえる。

こうした国内赤軍派の限界を真摯な論争によって克服していかなければならない。なことである。しかし我々の見解はそこに決して止まらない。そうした自己点検―相互点検は敵を確実に打ち倒す次の一歩を踏み出すものであり、同時に継続革命としての質をもつものとして展開されなければならない。即ち、敵と味方との攻防関係―階級闘争として展開すべきであって、タコつぼ的に行われては決してダメなのである。現在、日本赤軍は第二次綱領論争で提起し、連合赤軍が陥った隊内共産主義化論に陥っているのではないだろうか。

我々は日本赤軍にこうした疑問と批判を提出しつつ、我々の任務を一定明らかにしていきたい。我々は我々自身、プロレタリア革命党の中核はなるといふ傲慢さは毛頭持ち合わせていない。しかし共産主義者は党に組織されてこそ共産主義者たりうるし、プロレタリアートの最大の武器はプロレタリア革命党であるというマルクス・レーニン主義の原則に我々も立つ限り、革命党建設に向け積極的に責任をもつてその任務を全うすることを明らかにしておきたい。さて、我々の任務は何よりもまず在日本の共産主義者として日帝打倒、プロ独―社会主義革命を戦取することである。

我々のプロレタリア国際主義が各国革命の結合環を世界党建設として提起しつつも結果として国際拡散主義に陥ったことを自己批判しつつ、資本主義批判としての「共産主

義と労働運動の結合」を原則としつつ共産主義の内容でもある国際主義と労働運動の結合の問題を明らかにしていかなければならないだろう。

現在の世界の構造は七二年ベトナム革命の勝利によって米帝が後退し、ドルー金交換制崩壊―ドル危機の中で、IMF、GATT体制―国際通貨管理制が崩壊し、資本主義が常に落ち込む恐慌―インフレ不況を国際変動通貨制ではもはや解消しえず、帝国主義の侵略反革命戦争の危機は現実のものとして展開されんとしているのである。同時にベトナム革命以降ますますその覇権主義をむき出しにして、全世界人民におそいかからんとしているソ連社会帝国主義もまた侵略反革命戦争を現実のものとしているのである。こうした帝国主義、社会帝国主義の野望は、ベトナム革命の勝利、中国プロ独継続革命と呼応した各国人民の闘争の昂揚の中で、何としてでも反対派、革命派を圧殺しない限り延命できないという現実に基づく、ファシズムを準備するのである。即ち外に向けては侵略反革命戦争、内に向けては人民圧殺・大衆収奪のファシズムの全面化、これが帝国主義、社会帝国主義の現下の姿なのである。それ故、プロレタリア国際主義の立場はますます鮮明にされ、労働者階級が我物として闘い取らない限り勝利しえないのだ。

日帝においては、朝鮮侵略反革命と天皇性ファシズム攻

撃として具体化している。こうした敵の攻撃を爆砕しプロ独―社会主義革命を戦取するための国際的任務は、朝鮮人民の反米反日反朴の闘いと自主的平和的南北統一の闘いを支持し連帯し、朝鮮侵略反革命の前線基地である三里塚軍事空港、沖繩米軍基地を粉砕し、同時に米帝を追放し日帝を打倒し抜くことである。

そのためにもブルジョワジーの先兵となり、墓掘り人であるプロレタリアートを抑圧、圧殺せんとしている帝国主義、排外主義労働運動―IMF・JC・同盟―を打倒し社会帝国主義―日「共」、カクマルを粉砕していかなければならない。

こうした日本における国際的任務を果し、あわせてパレスチナ・アラブ革命を宣伝し抜き、地下党建設、国際地下ルートを建設し、日本―アラブ―朝鮮の相互還流を勝ち取ることがパレスチナ革命連帯運動を担ってきた我々の緊要の課題なのである。

我々の結合環は階級闘争の非妥協性、非和解性を堅持し不退転の決意でプロ独―社会主義革命を戦取することである。即ち、我々は「拒否戦線」なのである。

第二章 国際共産主義運動の

現段階（略）

第三章 日本革命と

当面する我々の任務（略）

第四章 パレスチナ・アラブ革命 の現段階

はじめに

ベトナム人民による民族解放革命戦争の偉大な歴史的勝利に続く、カンブチア、ラオスの革命戦争の勝利、そして、アジア・アフリカ・中南米諸地域の反帝・反植民地主義・民族解放闘争を、マルクス・レーニン主義に導かれプロ独立・社会主義実現の革命戦争で闘い抜く諸戦線の、持久的・恒常的ゲリラ戦、広汎な人民戦争の着実な勝利的進撃は、全世界的な階級闘争の深化・激化を導きだしている。

この「闘えば必ず勝つ人民の軍隊と、闘えば必ず敗ける帝国主義・傀儡の軍隊」の攻防の関係は、全世界の抑圧される民族、階級を大きく勇気付けると共に、武装闘争↓革命戦争の不可避の必然をすぐれて実践展開の上から指し示すダイナミックな教本であり、その攻防の関係における組織的・能動的・先制的な人民の軍隊が獲得した地平は、いまやはっきりと階級闘争↓革命戦争の攻防のヘゲモニーがプロレタリア人民の手中にあることの証査であり、偉大な歴史的画期としてあるのである。

民の共通の利益、共通の認識をゆるぎなき確信として組織されなければならないのである。

米帝を先頭とする世界帝国主義の陣営は、第二次世界戦争以後の一定の世界的な権力関係が、ベトナム民族解放革命戦争に続く全世界的な労働者階級、プロレタリア人民の階級闘争への決起の勝利的展開と、互に競合し反撥する帝国主義経済の危機的発展によるIMF、BIS体制の崩壊に直面し、自国内及び同盟内の権力再編を急いでいる。”ウォーターゲート”と”ロッキード”に象徴される一連の暴露的な情報工作により、資本主義・帝国主義の基本的構造的な不可避の矛盾を陰蔽し、”個的腐敗”を切り捨てることによって資本主義・帝国主義とその体制自体の延命を計っている。

米帝とソ連社帝この憎むべき階級敵、重武装の二大覇権主義国家は、階級平和のデタントII SALT・欧州兵力削減交渉等一連の世界資源・市場二分分割私物化策動の侵略と反革命を押し進めている。

米帝にとっては、仏帝の核兵器独自獲得によるNATO機構からの脱退II ECのヘゲモニー獲得と、インドシナ民族解放革命戦争によるSEATO体制の混乱による帝国主義同盟間の動揺をなんとかして取り鎮めねばならず、また

まさしく、我々の歴史は階級闘争の歴史であり、世界的同時性を獲得した労働者階級、プロレタリア人民の共通の敵、資本主義、帝国主義、社会帝国主義、国際シオニズム打倒へ向けた世界共産主義革命の歴史である。

全世界的に進行する帝国主義ブルジョワジーの権力再編の動きは、こうした労働者階級、プロレタリア人民の組織的・能動的・先制的な攻撃の勝利的進撃の前にする、厭きなきはない最後のながきであり、それだけに兇暴な大反動であり、侵略と反革命の悪魔的な策動なのである。

我々は今こそ、資本主義、帝国主義の体制的危機II構造的危機を労働者階級、プロレタリア人民の革命的好機へと転化せしめ、マルクス・レーニン主義の旗の下に、反資本・反帝・反社帝・反シオニズムの世界共産主義革命の戦線に結集し、世界革命の利益を一国的利益に優先させ、世界革命戦線創出の急務を自己党派の利益ではなく、革命の利益として集中し、プロレタリア国際主義で武装し全世界のプロレタリア人民の革命の軍隊と戦闘的に結合し、世界革命統一戦線の建設を戦取しプロ独立・社会主義実現・世界共産主義革命へ向けた非妥協不退転の闘いを永続的・非和解的に闘い抜かなければならない。

我々はこのマルクス・レーニン主義者・プロレタリア人

ソ連社帝の修正主義官僚クレムリン特権階級の口先の社会主義実際の帝国主義者共にとつての欲望を満たす最大のものとして、このデタントII SALT・兵力削減交渉はあるのである。

ソ連社帝によるアジア安保体制、ワルシャワ条約機構、米帝による東アジアの日帝強化、ヨーロッパにおける西帝強化、スペインの”日帝化”工作等一連の権力再編の動きは、自国の強大な核抑止力を背景に同盟間の”治安警察”を育て、資源・市場を独占する世界二分分割の侵略反革命である。

こうした、米帝、西欧帝、日帝、ソ連社帝の世界的な権力再編のファッショ的展開の中で、中東をめぐる状況は、まさに”着火寸前の火薬庫”であり、彼らの侵略反革命の貫徹に最大の障害となっているのである。

かかる帝国主義の侵略反革命の野望は、その貫徹へ向けたりふりかまわぬ”中東和平”をデッチあげようと策謀するのである。

「七七年を中東和平の年に」この帝国主義者とアラブ反動派の野合のスローガンは、強盗シオニスト・イスラエルと結託した米帝カーターの主導の下に、国連事務総長ワルトハイムの、そして米帝国務長官パンスの”中東歴訪”の先々に語られている。このスローガンに表象されている「

「和平」こそは、帝国主義本国内にある矛盾とアラブ諸国家内の矛盾とを闇取り引きする為の「和平」であり、文字通りの為にする「和平」以外の何物でもない。

米帝及び西ヨーロッパ帝国主義諸国そして日本帝国主義は、この間の増大する国際収支のアンバランスと、進行するスタグフレーションにその本質的構造的な矛盾を激化し、露呈させている。そして、もう決して「おとなしい勤勉な我々の労働者」ではなくなりつつある労働者階級の怒りが組織されることにもっとも恐怖し、その弾圧に最大の腐心をしてしているのである。かかる帝国主義本国内の矛盾の激化・深化は、帝国主義の最大の特質である侵略と反革命の帝国主義戦争に打って出るか、よりいっそうの労働者階級への搾取と抑圧の強化の中でしか彼らは解決しえないのである。帝国主義ブルジョワジーの延命の道をなりふりかまわず追求する彼らの政治委員会は、この矛盾の解消を「中東和平」のデッチ上げによって獲得しようとするのである。

帝国主義ブルジョワジーの中東問題に対する最大の関心は、いわずがなの石油であるが、「和平」による石油の安定供給の獲得と同時に、アラブ反動諸国内に激化している階級闘争の圧殺を計り、封建王国、反動政権のテコ入れの中で反革命同盟の世界的な強化を策動しているのである。すなわち帝国主義と結託するアラブ反動派は、問題の核

心であるパレスチナ人民の存在の全てを売りはらい、あたかもパレスチナ人民の権利獲得の勝利的展開であるかのごとき幻想をふりまき”ミニ・パレスチナ国家”の建設を強要するのであり、その売弁的行為によって自らの特権の永久的保証を得んと画策するのである。

ここに、強盗国家イスラエルのバックである国際シオニズムIIユダヤ世界支配の利益と、サウジアラビアを先頭とする、部族・教派的王侯、特権階級の利益と、世界帝国主義の利益がなりふりかまわぬ「中東和平」へと一致するのである。

かかる状況下にあるパレスチナ人民と我々とのプロレタリア国際主義に導びかれた連帯運動の基本的視座を獲得すべく、以下に情勢の分析を行っていくものである。

I、帝国主義の世界的権力再編 ——「中東和平」策動の侵略反革命

資本主義の体制的危機

米帝を先頭とする世界帝国主義の反革命同盟と強盗国家イスラエルのバックボーンである国際シオニズムのユダヤ世界支配陰謀集団は、世界的な資本主義の体制的危機にあたって、第二次世界大戦以後の支配体制の大改造を余儀なくされている。この危機は高度に成長した、そしてすぐれて国家別に存在する資本主義・帝国主義の本質的かつ構造的矛盾の露呈であり、この体制の永続的かつ基本的な条件である。

現代資本主義の脆弱性は、帝国主義諸国の景気循環の合一性と、企業政策決定力の圧倒的な途方もない集中、そして世界信用構造の不安定な状況等に見られる諸条件の同時的な生起によって高まってきている。

これらの要因は、相刻する企業諸集団の利益をのみ代表して行動する帝国主義諸国間の貿易紛争の激化、そして歴史的な市場と資源をめぐる闘争の尖鋭化によって増幅されているのであり、そしてこの帝国主義諸国は、同一の危機

に対しまったく同一に敏感に反応しただけに全世界的な規模へと拡大していく属性を持っている。すなわち、この帝国主義諸国家の全てが一樣に自国内の危機と矛盾の解決策をその国境外に求めようとするからである。

そして、帝国主義諸国家内の労働者階級の闘争の深化・激化は、明確に階級闘争II革命戦争へのベクトルを示しており、支配者ブルジョワジーに対し圧倒的な恐怖を与えている。労働者階級の多くは、職場で社会での新たな諸要求・闘争目標が、その戦闘性や潜在的には革命的な要求動機が、単に目先の物質的消費にあるのではなくて、社会的・経済的な搾取関係に、その支配と隷属の関係にあるのだということを先鋭的に打ち出しているし、資本主義・帝国主義の破壊的な強制力に抗し、階級闘争に勝利していく為には、一切の改良的な幻想を打ち捨て階級の暴力を組織し、革命戦争に勝利していかなければならないのだという革命戦争派の着実な成長があるのである。

資本主義・帝国主義の段階がすぐれて個別国家的であるのと相対し、労働者階級の階級的基礎はまさにすぐれて世界的にあるのであり、この発達した労働者階級の世界性は、階級闘争の世界的同時性を共に獲得し、労働者階級の国際的な連帯IIプロレタリア国際主義に導びかれた世界革命戦争を闘う戦線の団結と、マルクス・レーニン主義の断固と

した前衛党に指導された世界共産主義革命の大道が歩むべき科学的方向として獲得されているのである。

かかる資本主義、帝国主義の体制的危機を、労働者階級の革命的好機へと組織すべく活動する戦線に対し、支配者ブルジョワジーは最大級の弾圧と破壊を持って、自らの絶望的な恐怖を表象するのである。

資本主義・帝国主義諸国間に共通の、経済危機と階級闘争の深化・激化は、政治危機、体制危機へとその様相を純化して進行している。このスタグフレーションと国際収支のアンバランス、民間および政府に国家負債の急膨張は、すでに崩壊寸前のIMF体制、ユーロダラー銀行に対する大量の借用証書のタバを重ねる作業によってカツカツの線で踏みこたえていたのである。

作られた石油危機とその影響

一九七三年一〇月の第四次中東戦争と共に始まった、石油危機は、こうしたカツカツの線にいた西欧帝国主義、日帝を破産寸前に追い込んだ。

中東戦争のドサクサにまぎれて一挙的に大規模な利潤の獲得を目論んだ米帝は、西欧帝、日帝の弱体化しつつある経済に、決定的な大打撃をくわえ、国際収支におけるドルの地位回復をたくらんだのである。これが、アメリカ石油

資本、アメリカの銀行、そしてアメリカ政府が一体となつてのサル芝居いわゆる”石油危機”なのである。

すなわち、米帝石油資本・アラムコは莫大な利益を上げ、米本国への利潤送金が米帝の国際収支をたすけ、その莫大な流動資金を銀行が赤字諸国に収益率のよい条件で貸付けることによって、さらに利潤を拡大する……。この石油代金の大幅な引き上げによって、西欧帝、日帝の経済は、米帝の目論見通りに致命的な打撃を受けた。仏帝の外貨準備は一年で29%、伊、日帝は12%減少した。

この国際シオニズムに組織される、デイビッド・ロックフェラー、チェイス・マンハッタン銀行会長に統いられる多国籍巨大企業集団IIロックフェラー・コンダロマリット・エスタブリッシュメントによって引き起こされた、独立系石油資本(BP、ガルフ、アラビア石油など)潰しの”石油危機”策謀は、すでにイギリス経済の代表的存在であったロールス・ロイス社の倒産などで弱まっていた英帝経済を直撃し、七三年の一二月のたった一ヶ月間に中小銀行三〇行以上もの倒産を作りだしたし、この銀行に関連する産業のドミノ的倒産は史上類を見ない状況を現出したのである。

そして、クルップ、カール・ツァイス、ローライ、ホスクスワーゲンに代表される西独帝資本の戦後の”奇蹟の高

度成長”は、今やまったくの”利潤なき成長”として転落し、「第二次世界戦争以来最悪の経験」(クルップ社)を余儀なくされた。

伊、仏帝資本も同様の打撃を与えられ、生産コストの増大と輸出競争の矛盾した相刻する要求の競合の中で、根底的な破綻を認めざるを得なかつた。

こうした一連の西独帝資本にとつての脅威的な”危機”は、国内的には作られた不況に反発し、資本主義・帝国主義の政策決定に対する労働者階級の戦闘的な怒りによって包囲されている。西欧帝本国内の労働者階級の諸要求は、今や非資金的な政治闘争の様相を獲得し、あらゆる意味で階級闘争の地平を高めている。

六〇年代末の学生・青年労働者を中心とした政治闘争の水準が、今や西欧帝資本の基幹中核産業のストライキにまで組織され、武装したプロレタリア人民の軍隊をささえる広大な人民の海を形成している。

こうした、戦闘的労働者階級のマッセン・ストを武器とした闘争の爆発的な力量に恐怖した西独帝国家権力は、修正主義集団、西独共産党と手を組み、革命的な労働者階級の闘いの庄殺に兇暴な弾圧を加えている。

イタリアにあつても、革命的・戦闘的な労働者階級の階級闘争への決起は、フィアット社の労働者の闘いに代表さ

れる一連の周期的・継続的な工場閉鎖、工場占拠、自主管理への先進的な闘いを組織化しているし、修正主義のベルリン共産党、反動ネオ・ファシスト、宗派カトリックとの激烈な武装闘争を組織するプロレタリア革命戦争派がすぐれた持久的ゲリラ戦を展開している。

仏帝にあつても、六八年五月のゼネストを闘った労働者階級が、その戦闘性を保持しているし、社民との野合の改良主義の反革命マルシェ共産党と対決し、資本のレイ・オフや倒産を、工場占拠・自主管理・自主生産で闘い抜く政治性を獲得している。

英帝に於いても労働者階級の革命的な戦闘性は、既成の組合指導部の日和見改良主義的指導を挑ねのけ、着々と継続的な戦闘的マッセン・ストライキを組織し、階級闘争の攻防関係のヘゲモニーを手中にしている。そして、IRAに代表される武装勢力の不断の闘いが、プロレタリア革命派の武装を着実に組織しているのだ。

西欧帝の権力再編EC排外主義

こうした、西欧帝国主義諸国II ECの体制的危機は、この作られた”石油危機”一つで急転直下引き起こされた訳では勿論なく、資本主義・帝国主義の構造的な矛盾が、すぐれて均質的にあることの同時的な露呈であり、激化であ

る。

この結果、EC諸国の帝国主義資本は、打ちそろって対外直接投資を増大させた。この資本の投資先は、中南米、東南アジア、アフリカの各地であり、ポルトガルとスペインであり、ルーマニア、ポーランド、ハンガリーへの生産施設・本社機構をつくりそのままの移転すらある本格的な中核産業の「域外」脱出であり、侵略と反革命の一大輸出であった。この結果、西欧帝国内の矛盾をそっくりそのまま各地に持ち込んだ事により、その地の経済的・社会的階級攻防を同時に、帝国主義本国内の階級関係の攻防と均質のレベルにまで一挙的に高めあげたのである。

この典型を我々はスペインの今日に見ることが出来る。フランコファシスト政権による圧政下であって、米帝資本のヨーロッパ工場として収奪され続けてきたスペインの労働者階級は、このEC帝国主義の新たな殺到と搾取に對し、この侵略と反革命に對し断固とした闘いを展開したのである。ファシスト・フランコの白色テロ集団と実力で対決したプロレタリア人民の軍隊の革命戦争は、大きく労働者階級を勇気付け、特高警察の凄まじい暴圧の中で、ファシストに組織された組合の地下で、階級的な団結が組織されていったのである。

この闘いは、ファシストの統領、フランコの死を迎えてポルトガルで、ウルグアイで、ブラジルで、そしてポンドの「食料暴動」などに見られる様々の決起が、様々の様相を見せながらも、労働者階級の獲得した世界性と、階級攻防に於るヘゲモニーを自らのものとした、侵略反革命に對して革命戦争で対決する不断の戦闘性・組織性と思想性の展開として表われているのである。

ECは更なる矛盾を増大させながら、「域内」再編を構築しようとしている。ECの保護主義Ⅱ排外主義は、米帝によって「ヨーロッパの日本」化されようとしているスペインを、直接ECに組織せず、工業製品の自由貿易連合のみに組織する事によって、スペイン国内に投資したEC権益の保護と、同時にスペインの安い農業製品の無関税流入を拒否する事によって、「スペインの仲間入り」と米帝のより以上の「域内市場荒し」を阻止しようとしている。

日帝の権力再編Ⅱ天皇制ファシズム

このECの保護主義Ⅱ排外主義は、かつては互にその「奇蹟の高度経済成長」を称えあった、戦場国、敗戦国の「同僚」日本帝国主義資本の市場荒しに最大級の憎悪と恐怖をもって対決の姿勢を打ち出している。

一九七六年末のこの共同体の議会では、日本と欧州との貿易格差に帝国主義的感情をむき出しにした激しい非難を

全面的に開花し、大衆的な高揚をもって一定の民主化路線をスペイン政権に取らせる事に成功した。が、スペイン政権は改良主義的合理化政策をもって、労働者階級に對する新たな収奪を行っているのであり、労働者階級はこのスアレス政権との徹底した闘いを組織する中でしか完全な解放を獲得出来ない事を知っている。カリリョ共産党の革命を売り渡す反動的な屈服は、歴史的なスペイン革命に對する最大の侮辱であり、スターリニスト・修正主義の本質をまざまざと大衆的に明らかにしている反革命である。

スペインのプロレタリア革命戦争派は、バスク解放戦線に代表される永続的、持久的なゲリラ戦争を堅持し闘い抜いているのであり、国際的なプロレタリア革命派の連帯を作りだしているし、復活を自論むファシストと鋭く対決しているのである。

こうしたスペインの階級攻防の激化・深化を作りだしてしまつた、米帝、EC帝国主義諸国は驚愕し、やっきになつて「右派」を援助し、また仏共、伊共の「プロ独放棄・議會制民主制」Ⅱユーロ・コミニズムの修正主義反動反革命・「白い」非共産党を利用し、カリリョ共産党のより一層の反革命化を画策しているのである。

こうした一連のEC帝国主義の侵略反革命に對する階級関係、階級攻防の深化・激化はいたる所でおこっている。

爆発させた。

「ECは日本と戦争するか、日本に降参するかしかない。降参したくなくばECは、断固たる措置をとるべきだ」

この輸出品目、工業製品の相似した帝国主義資本の激突相刻、敵対関係は、「生産全開の時には資源をめぐる闘いであり、停滞と景気後退の時には市場をめぐる闘争である」資本主義・帝国主義の運動の特質をすくれてまざまざと見せている。

この「適度」にふるまい、賢明に行動するよう「要請され、」出方次第では強硬措置もとる」と西欧帝国主義の「前段階的宣戦布告」もとれる警告を受けた日本帝国主義、すなわち我々日本労働者階級、プロレタリア人民の眼前の敵は、第二次世界戦争Ⅱ侵略反革命強盗帝国主義の資源獲得戦争に破れた体制的、経済的、風土的病弊を米帝の軍事的・経済的傘下に組み込まれる事によって、合理化再編をなしとげ「朝鮮戦争」に反革命加担する事によって膨大な特需を受けて、一九五〇年代には、「奇蹟の経済復興」をなしとげた侵略と反革命の「戦争成金」であったのである。

この天皇制軍事的封建的帝国主義体制を第二次世界戦争の敗北によって合理化し更に、朝鮮戦争への反革命加担による「経済復興」によって純化した、日本資本主義・帝国主義は、米帝と結託して東南アジア諸地域へ再び侵略を開

始し、ベトナム、インドネシア、南朝鮮に反革命を組織していく中で、奇蹟の高度経済成長を一九六〇年代に築きあげたのである。この間の労働者階級への圧倒的な搾取と抑圧は「国土再建」「経済復帰」「所得倍増」「一等国」などのGNP神話によって反革命的に組織されてきた。こうして日帝は資本を拡大し、侵略反革命の野望を開花させたのである。

一九六〇年代後期に激化した日帝本国内の矛盾は、学生青年労働者を中心にした政治闘争への連続的な決起によって大衆的に明らかになり、体制的な危機を作りだした。この体制的な危機を革命的危機へとする革命戦争派の登場は、日帝の根底的な恐怖を呼び起し強弾圧・重包囲の一大反革命体制をもって圧殺攻撃を受けたのであった。

こうして国内的な矛盾の激化・深化のあらわれを、情報工作と強弾圧で乗り切ろうとしていた日帝にとって、この「石油危機」は、無資源工業国の最弱の環をつかれた大打撃であった。日帝もまた西欧帝諸国と同様に戦後最大の企業倒産を数えた。

が、日帝はこの「石油危機」を国内的な産業再編・企業再編の好機として逆手にとり、中小企業の切り捨て・統合によって資本の再編強化を画策していき、資本の集中、独占化をもって乗り切った。この作られたパニック的な不況

の中で、この「危機」メジャーの石油売りおしめ、価格つり上げによって影響されず、先述の様に莫大な石油代金の国内への流入による、ドルの地位回復、流動資金の獲得等、米帝経済全般の利益となり、弱体化し大打撃をこうむった西欧帝、日帝を、米帝の指図に従わせることが出来ると、米帝の政策決定権を持つこの多国籍巨大資本は考えていたのである。

が、この脚本には劇的展開に於るダイナミズムを科学的に把握し構築する、ドラマツルギーの基本に欠けるところがあったのである。これは決定的な欠陥であった。目前の山のように利益獲得にのめり込み、長期的巨視的な計画された科学をその政策とし得ない資本主義経済の当然不可避の脈絡ではあった。

この脚本は、悪役をふり当てられたOPECの造反、石油戦略によってのもろくも瓦解したのである。

OPECとメジャーの関係の定立が唯一の条件であり、石油価格の急上昇が米帝の利益をもたらすこの脚本は、サウジアラビア、イランのメジャーに対するしめつけを逆にまねくことによって、米帝の野望を打ち破き、米帝の目論み通り経済力を低下させていった西欧帝、日帝と共に自ら描いた没落の青写真に米帝をもまた組み込んでいたのである。

によってもたらされた労働者階級の爆発寸前の怒りを、日帝は「単一族・単一国家」としてあるとする特徴的な天皇制への集中として逆組織しようとしている。この幻想と虚構の上に搾取と抑圧の人民の血でかためた天皇制ファシズムへの移行は、資本主義・帝国主義の本質的構造的な不可避の矛盾を隠蔽し、戦後支配体制の累積された体制的諸矛盾を「腐敗」として暴露する事によって、資本主義・帝国主義それ自体の延命を計る策謀であり、侵略と反革命の新たな体制構築である。

ここでは、この日帝の権力再編Ⅱ天皇制ファシズムⅡ侵略反革命国家体制への移行と、我々の任務を詳しく展開する紙数を持たないので後日提出するが、日帝、西欧帝この競合し相刻する帝国主義にとっての共通する権力再編の動きを把握することは出来るであろう。

アラブ反動の自立化、石油戦略

この国際シオニズムに組織されるロックフェラー・コングロマリット・エスタブリッシュメントによって企画された「石油危機」は、西欧帝、日帝に一大打撃をあたえ、その混乱を作り出す事においては、一定の成功を見た訳であるが、この野望は足下の大きな落とし穴に気付いていなかった。米帝経済は、石油輸入依存度が西欧帝、日帝よりも低い

これは現代資本主義の段階がすぐれて個別国家的にあることと、資本主義諸国経済の合一性、統合性の不可避的帰結である。

米帝によって「石油危機」の演出者であるとされたアラブのサルタンは、それまでの純王侯的な(?)メジャーまかせの石油政策を改変し、それこそ莫大なオイル・マネーの資力をもって、メジャー利権の奪還と供給販路を自力で作成することを試行し、まずもってOPECはメジャーに対する税金と利権料を大幅に引きあげたのである。そして、サウジはアラムコのようなメジャーはもはや必要性のあるものではないとし、生産利権の接収をも発表したのである。OPEC諸国は、自国内の富の最大のものであり有限資源である石油を文字通り最大限に利用していかねばならないことに気付き始めたのである。

こうした、アラブのいわゆる部族的、教派的なサルタン支配の封建制を牛耳ってきた特権階級の「進歩」は、自国内に生起しつつある階級闘争への自己保身としての「合理化・進歩」であり、これまでの米帝との野合を修正するような意味のあるものでは決してなく、むしろ、より積極的な反動的な結合への条件作りとしてあるのである。

この永らく帝国主義諸国にとって、大きな資産としてあったアラブ王侯諸国の反動的性格は、「石油戦略」を武器

として活用することによって、政治的反動性を全世界的に開花させ、もって国際政治の舞台での大きな発言権を獲得したのである。

資本主義、帝国主義諸国とアラブ反動派の権力再編は、こうした相互の脈絡をもつて構築されようとしているのである。

アラブ反動と帝国主義の結託

この莫大なオイル・マネー運営権を握るアラブの反動政権は、自らの資力（一九八〇年には六五三〇億ドルもの資本を運用出来る。世界銀行調べ）をもつて、自国を独立した資本家集団として競合の舞台へ打って出ようとしているのであり、この米帝、西欧帝、日帝などの借金帝国主義のコントロールをはるかにこえた情勢は、はつきり資本主義・帝国主義諸国にとって直接的な脅威となつてきている。

もはや、西欧帝、日帝は、米帝のひもつきメジャーを無視し、アラブ反動政権との直接的な協定を結び、一九七四年にはアラブ反動は技術援助、大規模プラントの輸入と引き換えに、メジャーに売るよりもバーレルあたり一ドル安く石油を売り渡しはじめたのである。

こうした動きに対する米帝の再三の武力行使の恫喝も、西欧帝、日帝の反撥とアラブ側の総反撃の前に一切の力を

持ちえなかつた。

ここに於て、米帝はニクソン・キッシンジャー路線の破綻を自覚したのである。

一九七四年中に開始された、世界的な帝国主義の権力再編の動きは、このOPECの「石油戦略」とオイル・マネーの運用をめぐる脅威によって引き起こされた、エネルギー産業および兵器産業を中心にした政策立案中枢の、ブルジョワイデオロギー、ブルジョワ行政家の首のすげかえによって、体制的な危機を突破しようとする試みであり、戦後支配体制・帝国主義の矛盾をファシズムによって止揚しようとする試みである。

アラムコ、ガルフ・オイルの二大メジャーの相刻と、ロッキード、ダグラスの相刻がそれであり、アラムコが全生産利権をサウジアラビアに譲渡したことで、ロッキードのクウェイト資金導入（株式の25%）をめぐる問題に特徴的に表われている、オイル・マネーの脅威を目の当りにした国際金融資本の恐怖が、主要な源動力となつての権力再編の動きなのである。

この国際金融資本、米帝本国内に中枢を置き全世界の銀行への絶大な発言権を有している、この巨大資本は、「アラブの土侯達の勝手気儘なオイル・マネーの運用は、ユーロ・ダラー市場に最悪の打撃をあたえている。」とし、こ

の恐怖が、ファースト・ナショナル・シティ・バンク、チエース・マンハッタン、バンク・オブ・アメリカ、を筆頭とする代表的な帝国主義の政策決定権を有する、そして互に競合する市場獲得戦の最中にある中央銀行の意見調整をなしたたのである。

この国際金融資本を始めとした多国籍の巨大資本、GE、GM、IBM、デュポン、ゼロックス、アームコ・ステイール、シンガー、コンティネンタル・グレイン、ITT、PANAM、オクシデンタル、などの資本主義の権化は、世界戦争かファシズムかの瀬戸際に立った危機的状況にあつて、明確にファシズムへの権力再編をもつて現状打破を工作しているのである。

こうした、アラブ反動諸国の自立化「石油戦略」を最大の武器にしての資本主義・帝国主義諸国との国際関係における、優位的展開と莫大なオイル・マネーのはかりしれない流動的経済活動によって生み出される諸力を、ファシズムによって世界的な権力再編を工作する帝国主義陣営が、決して見過す訳はないのである。歴史的な米帝、西欧帝のアラブ諸国に対する差別的な海賊的対応の時代は終り、権力再編の時代の世界的展開の盟友としての位置をアラブ反動諸国に与えることによって、彼らの「平和」を築きあげようとしているのである。

この資本主義、帝国主義、反動派の共通利益を唱いあげ「七七年を中東和平の年に」のスローガンを持つての、ジュネーブ会議の開催策動こそは、世界的な権力再編による反革命同盟の強化策であり、全世界的な労働者階級への新たな搾取と抑圧の開始であり、侵略と反革命の悪魔的攻撃の開始を告げるプロローグであるのだ。

人類の富であり、人民の財産である有限資源を独占し、莫大な利益を私有するこの特権反動封建王侯と、資本のあくなき拡大再生産を追求する搾取と収奪の資本主義、差別、抑圧、侵略と反革命の帝国主義の憎悪すべき同盟に対し、全世界のプロレタリア階級人民は断固とした闘いを組織せねばならない。

そしてこの時、またしても反革命として登場するソ連社会帝国主義の存在を、我々は決して許すことはできない。

ソ連社帝の位置

米帝と共にジュネーブ会議の共同議長国であるソ連社帝は、中東に於る自国収益の増大拡充唯一主義の覇権主義の典型として存在している。ソ連社帝は帝制ロシア以来の南進策をもつて、まさに口先の社会主義実際の帝国主義の欲望もあらわに、針ネズミの様な重武装で中東諸地域での市場獲得戦に恫喝外交をもつて臨んでいる。ソ連社帝にとつ

ての「中東和平」は、アラブ諸国の労働者階級の利益とは一切無関係であり、それは、インド洋岸地域での自国権益を、紅海、地中海沿岸地域に拡大していく覇権主義の帝国主義的侵略以外のなにもでもなく、ソ連社帝の目的的政策の前には、労働者階級、革命的人民をあたかもチェスのコマの様に使い捨てる没階級的な策謀を行っているのである。エジプトのサダト路線へのカタ入れ、そして援助引き上げのマキャベリズムの政治力学が、エジプト、シリア、スーダンの急速右旋回をまねき、そのことによって中東諸国の労働者階級に対して、まさに暴風のような大弾圧をまねかせたがごとき、反革命以外のなにもでもない存在としてのみ登場しているのである。

そしてまた、ソ連社帝は、口先の社会主義実際の帝国主義の本質もあらわに、資本主義、帝国主義諸国に対し、賤しむべき媚を売っている。ソ連社帝は、一九七三年以来シベリヤ地域、カマ河、ボルガ総合開発の権益を、資本主義帝国主義の多国籍巨大企業に売り渡している。石油、天然ガス、鉄鉱に関連する膨大なプラントを手中にするために、ソ連人民の財産であり、人類の富である有限資源を資本主義と帝国主義の腐り果てた体制の延命の為に進んで売りはらっているのである。まさしく、資本主義、帝国主義と並んで、ソ連社帝こそは、全世界の労働者階級にとって、完

膚なきまでに打倒しつくすべき階級敵である。

以上に述べてきたごとくに、この「中東和平」策動こそは、帝国主義のアラブ反動派へのテコ入れの侵略反革命であり、そしてソ連社帝の反階級的な覇権策謀であり、世界的な帝国主義のファシズムへの移行を指し示すものであり、労働者階級、プロレタリア人民にとって、まさしく明確なすさまじい暴力的な攻撃である。

我々は、全世界の労働者階級、プロレタリア人民と共に堅く団結し、この帝国主義の全世界的な権力再編のプロログである「中東和平」策動を、ありとあらゆる戦術を持って爆砕していかなばならない。

II、パレスチナ・アラブ革命を圧殺する ジュネーブ会議開催「ミニ・パレ スチナ国家」案

米帝の基地シオニスト・イスラエル

ファシズムへの転生を上げようとする帝国主義の醜悪な欲望と、莫大なオイル・マネーと石油戦略で非産油国を買収し、AA諸国の盟主として君臨しようとするアラブ反動派の利益と、いまや資本主義・帝国主義の補完物以外の何物でもない、口先の社会主義実際の帝国主義のソ連社会帝国主義が三ッ巴となって、全世界の、就中パレスチナ・アラブの労働者階級、プロレタリア人民に対して、重包囲の侵略と反革命を開始せんとしている。

我々は、労働者階級の世界的同時性を持って、マルクス・レーニン主義の実践主体として、プロレタリア国際主義で武装し、全世界の労働者階級、プロレタリアート人民と堅く団結し、この階級敵、侵略反革命同盟の意図を鋭く見すえ、断固とした闘いに決起せねばならない。敵共の体制的危機を我々の革命的好機として転化し、侵略反革命戦争を革命戦争で打ち破らねばならない。

「一九七七年を中東和平の年に」この帝国主義とアラブ

反動のスローガンは、本年初頭からの国連事務総長ワルトハイム、米帝国務長官バンスの中東諸国歴訪の途次叫ばれ続けていた。

国際金融資本、多国籍巨大企業の支配階級の中核部分を組織している、国際シオニズムIIユダヤ世界支配陰謀集団の意を満身に受けて登場した、彼らの政治委員米帝カーターは、その番頭バンスに対し、シオニスト強盗国家イスラエルに向けた、次の様なメッセージを託した。

「米・イスラエル両国間に永続的信頼を維持することが、中東和平の模索に当たっての基本的で第一優先の原則だと確信している。米国はイスラエルの存続と安全保障に深くコミットしており、これが平和への目的そのものである」

このメッセージ一つからでも伺い知れるように、米帝カーターの中東に於る「和平」の「第一優先の原則」が、帝国主義と国際シオニズムの人工国家「イスラエルの存続」であり、「安全保障」なのである。英帝、米帝と国際シオニズムの結託によって、或る日突然地図の上に線引きされた、この「我が領土に国境はない」とするユダヤ選民主義・国際シオニズムの侵略基地をなりふりかまわず防衛し、更に、パレスチナを収奪してイスラエルをデッチ上げたように「ナイル川からチグリス・ユーフラテス川までの地域が、かつて我が祖先の土地であった。それは我々が当然受

けつぐべき領土である」との、神話侵略主義に基づくあくなき領土拡大の野望を支持し抜くことが米帝カーターの任務そのものなのである。

この米帝とシオニスト・イスラエルの結託の産物が、「中東和平」ジュネーブ会議開催への道程として表わわれている、アラブ反動との野合策謀なのである。

ブルジョワ民族主義アラブ反動派

すでにI章で述べたように、米帝とサウジアラビア、イラン、ヨルダンの癒着は明らかであり、特にサウジは、その膨大なオイル・マネーの投資先として、米経済と離れがたく絡み合っているものであり、すなわち、米財務省証券百億ドルもの安定した保有者であるばかりでなく、米企業、銀行の最大の顧客であるというこの事実、サウジにとつて米経済の低落は自国資産の損失を意味する重大事なのであり、より積極的に米帝との反革命同盟化を画策するのである。

このサウジの莫大なオイル・マネーをもつての買収工作で、かつてはソ連社帝に隔らされていたエジプト反動サダトが、アラブ反動のスポークスマンとして登場し、「イスラエルの存在の事実」の承認の用意があるなどという、パレスチナの収奪と大殺戮、侵略とパレスチナ人の根だやし

国家「建設などという、まったくのパレスチナ人民のそしてアラブ人民の革命戦争を圧殺する目的以外の何ものでもない構想を明らかにしているのだ。

「ミニ・パレスチナ国家」案の反革命性

シオニスト・イスラエルの政治委員会、社民第二インター・イスラエル労働党は、本年二月の党大会で「ヨルダン川西岸での譲歩」という「ヨルダン川西岸での領土上の妥協」を政治決議として打ち出した。この政治決議は、元国防相でありシオニスト暴力団出身者である悪名高き「片目のダヤン」らの反対提案を極めて小差で退けての決議である事を確認しておかねばならない。

「言葉よりも領土を」「我が領土には国境はない」とする、シオニスト特有の選民主義に基づく、極めて偏執的な土地に対する執着をここでも記憶しておかねばならない。

こうした一連のヨルダン川西岸地域を問題にする動きの活発化の中で、米帝国務長官バンズは次のように発言している。

「PLOはジュネーブ会議再開前にヨルダンとの間に正式の関係を樹立すべきだとの、サダト提案は建設的な示唆である。この提案はジュネーブ会議再開への大きな障害となつている手続き問題に関する対立を狭めるものだ。エジ

を願ったジェノサイドを遂行したシオニスト・イスラエルの存在を合法化するがごとき、まったくもって恥知らずな発言をなしている事実は、アラブの大義とやらを振りかざし「中東問題の核心はパレスチナの問題」であるというポーズの実体が、米帝、サウジ一体となった、多額の経済援助、武器供与のゴチソウの前に、いとたやすく転び込み、ゴロニャン、ゴロニャンと涎を垂らして媚態の限りを尽す売弁以外の何者でもない存在の証査である。エジプト反動サダトは、国内的な労働者階級の激しい闘争の高まりを恐れ、先の物価値上げ反対闘争に見られた労働者、農民、市民、学生の闘いに対して、武装した軍隊を出動させ大弾圧を行い、その結果、多くの大衆的な反発を引き起こし、食料、衣料などの値上げを取り下げざるを得なくなるや、物価値上げ反対闘争を組織したのは「反アラブ的破壊分子」であるとして、先進的、革命的な労働者、学生、プロレタリアート人民の組織に対して、極めて報復的な暴力的弾圧をかけているのである。ストライキ、デモの一切を禁止するこのサダトのやり口は、朴傀儡のやり口と同質の極強権反動反革命の憎むべき支配の論理である。

このエジプト反動サダトは、サウジ、米帝、シオニストイスラエルの意を受けて、「ヨルダンとパレスチナ国家の連邦」による、「ヨルダン川西岸地域の」ミニ・パレスチナ

プトはパレスチナ問題でイスラエルとの妥協に向かい始めたようだ。エジプトがPLOに対する影響力を行使して、PLOのイスラエル解体という路線を放棄させることを期待する」

このバンズ発言に全てが読みとれるではないか。なにが「サダト路線は建設的な示唆である」この路線の全てはパンスの路線教唆である。国際シオニズムと結託した米帝カーターの路線引きは丸見えで、誰れの目にも明らかである。米帝バンズのシオニストイスラエル訪問は二月一五日であり、エジプトへ入ったのが一七日、一八日にベイルートでサダト提案なるものを評価し、二五日がイスラエル労働党大会決議の日程であった。この間のパンスの日捲り唇の一言案内には「ヨルダン川西岸」「ヨルダン川西岸」と書き連らねてあったに相違ない。

そして、二〇日にパンスは、サウジにおいてこう発言している。

「パレスチナ問題は中東問題の核心であり、中東問題全体の解決に到達するために、解決されなければならない」そしてまた「中東問題」解決の展望について「楽観的だ」としているのだ。

このバンズ発言を受けて、サウジ反動の外相サウドは、「長官の声明は、平和実現のチャンスに関し、私を楽観

的にさせてくれた」と述べているのだ。

この米帝、シオニスト・イスラエル、アラブ反動の口先をそろえての「ヨルダンとPLOの関係正常化」と「ヨルダン川西岸のミニ・パレスチナ国家」案の唱いあげは、パレスチナ人民の権利を一切踏みじり、パレスチナ・アラブ革命を封じ込め圧殺しようとする総掛りの大反動攻撃である。

ヨルダン国王フセインがCIA米帝と結託し、ヨルダン領内のパレスチナ人民キャンプを砲火でつつんだ一九七〇年九月のヨルダン内戦と一九七一年七月のジェラシ山攻防の、最も重大な責任者である事を、全世界の労働者階級、プロレタリアート人民は、ミュンヘンオリンピック遊撃戦を闘ったパレスチナ・コマンドへ黒い九月の手Vの部隊名称の由来と共に熟知している。

このヨルダン反動フセイン専制支配特権サルタンを誰れが許すことができるというのだ。CIAから多額のパレスチナ人民キャンプ破壊の礼金を受け取り、平然と「国家の為にその資金は使用した」とうそをぶいている、この男と「正常な関係」が結べるパレスチナ人は、それは裏切り者のスパイ以外には存在しない。パレスチナの革命的人民は、今もなお、ヨルダンの革命的部隊へヨルムムク軍団Vと共に、ヨルダン反動に対する革命戦争を堅持しているのだ。

義の闘い」であると平然と公言し、PLO米帝パレスチナ人民を「山賊のテロリスト」と決めつける許し難い差別主義者であり、度し難い侵略主義の代表的スポークスマンなのである。この様なシオニストユダヤ選民主義陰謀集団とひそかな密議をこらし、ソ連社帝は、自国利益の拡大を追求すべく、その覇権主義の尖兵、キューバ修正主義カストロをアルジェリア、リビアへ送り込む一方、社帝の頭目コスイギン自らのイラク・パース党政権への介入を画策しているのだ。

そしてまた、憎むべき政治力学主義・覇権主義のソ連社帝は、一九七三年末にエジプト反動サダトが第四次中東戦争終結にあたって米帝と闇取引きをした事に怒り、一切の軍事援助を打ち切り、大規模な技術派遣団をすべて引き揚げてしまったという訳であるが、何と驚くべき事に、この引き揚げてあったミグ21戦闘機一五〇機を含む膨大な援助物資を再び供与する事をサダトに約束したというのである。

このソ連社帝の一切の階級的視点を欠落させたハイエナのごとき手口は、パレスチナ・アラブの労働者階級、プロレタリアート人民の革命戦争勝利へ向けた不断の苦闘とはいささかも関わりはなく、それこそ、プロレタリア世界革命とはえんもゆかりもないものである。

「民族主義」左派から社会主義実現へ向けて展開してい

帝国主義者、反動派の意図は明白である。パレスチナ人民をヨルダン川西岸の「ミニ・パレスチナ国家」に封じ込め、CIAの手によって訓練された、ヨルダン反動治安警察軍の手によって武装解除を強制しようとしているのである。

この「ミニ・パレスチナ国家」案こそは、反動的な破壊的な策謀であり、反革命である。そして「ミニ・パレスチナ国家」こそは、強制収容所であり、差別と抑圧の閉塞地帯である。

ソ連社帝の覇権主義

そして一方ソ連社帝は、この一連の帝国主義と反動派の結託・野合の中で進められている「中東和平」、ジュネーブ会議開催、「ミニ・パレスチナ国家」建設の陰謀の図式の中で、口先の社会主義実際の帝国主義の野望を果す為に卑劣な策動を行っている。

ソ連社帝トロヤノフスキー国連大使は、ニューヨークに於て、シオニスト・イスラエル国連大使ヘルクオーツとひそかに「中東問題」に関して密議を行った。しかもそれは、シベリア利権をめぐり結託したシオニスト共の仲介によって行なわれたのであり、また、このヘルクオーツこそは、シオニスト暴力団のパレスチナ人民に対する大殺戮を「正

るアラブ左派諸国、リビア、イラク、イエメン、アルジェリア、エチオピアの階級闘争の前進を阻み、修正主義と覇権主義の恫喝外交で社会帝国主義の反革命へと組織せんとする、このソ連社帝の策謀を断じて許してはならない。

我々は、プロ独樹立社会主義実現、世界共産主義革命への大道を進むパレスチナの武装して闘う人民と共に、アラブの革命的人民、そして全世界のマルクス・レーニン主義の旗の下に、プロレタリア国際主義で武装して闘う同志兄弟姉妹と堅く団結し、この、帝国主義、シオニズム、社会帝国主義、反動派のなりふりかまわぬ野合の反革命を、断固とした革命戦争で粉砕し尽さねばならない。

PFLPを先頭とするパレスチナ革命的武装勢力は、イエメン人民民主主義共和国(PDRY)、オーマン・アラビア湾解放人民戦線(PFLAG)、イラク革命党、ヨルダン革命派ヨルムムク軍団、シリア革命党、エリトリア解放戦線、エチオピア人民革命党と結合し、マルクス・レーニン主義の下に組織的共働の連帯を深めているのである。

「中東和平」策動、ジュネーブ会議開催、「ミニ・パレスチナ国家」建設の策謀は、このパレスチナ・アラブの革命勢力圧殺を目的とした、まさしく侵略と反革命の陰謀である。帝国主義とシオニズムと社会帝国主義とアラブ反動のドス黒いサバトである。

侵略反革命を革命戦争で打倒する拒否戦線

一九七六年来のレバノン革命戦争は、キリスト教徒右派と回教徒左派の、いかにも一種の宗教戦争のようにブルジョワ・マスコミによって情報操作されているが、これは明らかに、パレスチナ・コマンドの武装解除を狙った帝国主義と、シオニスト、ファシスト、反動派の反革命同盟による、革命派圧殺の「中東和平」策動の先験的な挑発を逆規定了した革命戦争であった。

レバノン・ファランヘ（ファシスト）党は、ナチスの残党によって結党され、イタリア、スペイン、ポルトガル、OASなどのネオ・ファシズムと枢軸する、自由港ベイルートの暗黒街を支配する国際ギャングであり、ファシズムとユダヤの関係を歴史に学べば明らかに矛盾するのであるが、レバノンにあっては、シオニスト、CIAの援助を受けている私兵集団である。

そして前内相シャムーンに率いられる国民党は、キリスト教マロン派（レバノンの支配階級の教派）の私兵集団であり、このシャムーンはレバノンのトップ・クラスのブルジョワである。

こうした、ギャングとブルジョワの私兵集団が、帝国主義とシオニズムの手先となって、パレスチナ人民に対して

このシリア反動のレバノン革命戦争圧殺介入の結果、シリア・ヨルダン・レバノンの対イスラエル和解統一戦線の反革命同盟と、エジプト・スーダン反動同盟は、サウジ反動の仲介で、今や空前のアラブ反革命同盟を形成しているのである。

こうした反動の結集は、エチオピア、スーダン、イラン、オーストリア、モロッコ、エジプト、サウジ、レバノン、ヨルダンに大なり小なり見られる、労働者階級の革命的決起に対する絶望的な恐怖のあらわれである。

であるが故に、武装して闘うパレスチナ人民をなんとかしてでもヨルダン川西岸の「ミニ・パレスチナ国家」に封じ込め、完全に武装解除しようとするのである。

なぜならば、PFLPを始めとした、パレスチナ解放をアラブ解放、世界革命として、革命戦争路線を堅持して闘う、PLO拒否戦線派は、今や、全アラブの、全世界の抑圧される民族、労働者階級、プロレタリア人民の希望であり、共働の同志であるからである。

我々は、この帝国主義、社会帝国主義、シオニズム、アラブ反動が一体となつての「中東和平」策動、ジュネーブ会議開催、「ミニ・パレスチナ国家」建設に反対し抜き闘い抜かねばならない。

ジュネサイドを行ったのである。

これは今日の「中東和平」策動の布石としてあったのである。

もちろん、こうした反革命的な犯罪的な試みに対して、レバノンの労働者階級、プロレタリア人民はパレスチナ人民と共に共同の戦線を構築し、レバノン・アラブ革命軍を始めた戦闘部隊を組織し闘い抜き、いたる所でギャング、ファシストを殲滅したのである。こうした、パレスチナ人民とレバノン人民の階級的な団結の形成の圧倒的な進撃に恐怖したアラブ反動、帝国主義は、サウジ反動の「民族同士の内戦の停止」という大義立てによって、シリア反動の「アラブ平和維持軍」を出動させたのである。

このサウジ反動からの多額の出動手当をもらい受けた「アラブ平和維持軍」なるものが、どの様な性格を持つものかは誰れの目にも明らかである。

シリア反動アサドの統括する「アラブ平和維持軍」は「民族同士の内戦停止」という階級平和の無内容な口実を持って、しかしその実、パレスチナ人民、レバノン人民に対して凄まじい大弾圧を行なったのである。死者六万以上というこの戦争は、最初から最後まで徹底してパレスチナ人民に対する、レバノン人民に対する圧殺、すなわち革命派に対するジュネサイドとして展開されているのである。

III、PFLPの革命戦争路線と我々

PLO右派の反革命路線

I章、II章で展開してきたように帝国主義とシオニズム、社会帝国主義とアラブ反動派の「中東和平」策動、ジュネーブ会議開催、「ミニ・パレスチナ国家」建設の陰謀が、パレスチナ・アラブ革命の圧殺手段であり、武装して闘う社会主義者、共産主義者にかげられた重大な挑戦であり、パレスチナ・アラブのみならず、全世界の労働者階級、プロレタリア人民に対する、世界的な権力再編IIファシズムの侵略反革命以外のなにもでもないのである。このことを我々は共通の認識として確立せねばならない。そしてさらに、現下、かかる圧倒的な二重三重の重包囲下にある、パレスチナ人民の解放組織PLOに組織される各戦線の路線の検証を進める中で、マルクス・レーニン主義に導かれ、反資本・反帝・反シオニズムのプロレタリア世界革命を追求し、プロ独樹立・社会主義実現・共産主義建設を、プロレタリア国際主義で武装して闘うPFLPを先頭とする拒否戦線の路線を正しく把握し、日帝本国内に於る我々のプ

ロレタリア国際連帯運動の基本的視座を獲得していかなければならない。

PLO右派すなわち、アル・ファタ、アル・サイカ、PFLPは、レバノン革命戦争へのシリア反動アサドII「アラブ平和維持軍」の反革命介入による革命派圧殺により、この間発言権を増大させてきている。

アル・ファタは一言で言ってしまうとブルジョワ民族主義路線であり、サイカはシリアバース党のパレスチナ部隊であり、PFLPはマルクス・レーニン主義を綱領としながらも改良主義に落ち込んだ日和見経済主義路線である。この三派は今やアラブ反動に屈服し、パレスチナ大衆の内包する革命性を売り渡そうとしている。

PLO議長であるアル・ファタの代表・民族主義右派のアラファトは、エジプト反動サダトとサウジ反動の手中にあって、この間反革命性をあらわにしてきている。

アラファト一派は、エジプト反動の後押しを強力に受けて、「中東和平」策動の中に自ら組み込まれ、帝国主義・反動派のおコボレにあずかるうとしているのである。アラブ反動の権力再編の一連の動きの中で、民族主義のパレスチナに於る代表権者として行動することによって、ジュネーブ会議に於る発言権と「ミニ・パレスチナ国家」を私物化し、あまつさえヨルダン反動に売り渡そうとしているの

である。アラファト一派は、現下の世界的な権力再編の動きがすぐれて帝国主義のファシズムへの移行としてあることにまったく気付かぬ、民族主義右派の頑迷な虜でありその路線はブルジョワ民主主義路線である。

PLO政治局長カドゥミに代表されるPFLPの路線は「ミニ・パレスチナ国家」を「暫定的解決である」としながらも積極的に認めていき「建設されるパレスチナ国家について、米国を含む国際的保証を求める。同国家はヨルダンとの連携を確立すべきだが、同時に独立した軍隊、政府、議会、外交代表権を獲得すべきである」とするプチブル急進主義の改良主義、清算主義の路線である。

こうした路線のもとで、パレスチナ・アラブ革命の武装解除を意味する「ミニ・パレスチナ国家」建設を積極的に推進しようとしているのである。

シオニスト・イスラエルに対するこの両派の不断の戦闘性も、アル・ファタのそれは民族主義的排外主義のそれである。PFLPのそれは、プチブル急進主義のそれであり、現下の階級攻防の関係をとらえられない没階級的な存在としてあり、即反革命化する充分な恐れのあるそれである。

PNC開催策動の反革命性

この両派は、エジプト反動、サウジ反動の働きかけで延期され続けてきたPNC（パレスチナ国民評議会）の開催を急いでいる。このPNCの開催・議決のヘゲモニーを取りきることによって、アラブ反動の思惑である「PLOにミニ・パレスチナ国家案を受け入れさせた上で、PLOと共にジュネーブ会議でイスラエルと交渉する」という反革命路線の形成を急いでいるのである。

シリア反動のレバノン革命介入、革命派圧殺の攻撃は、勿論こうした路線へのPLO右派の引きつけとしてあった訳であるが、このPNC開催の動きの中で、「ゲリラ組織代表のPNC代議員排除」をその軍事力を背景に強要しているし、シリアの影響下にあるアル・サイカも「PNC開催タナ上げ」を主張している。これは、シリア反動の「アラブ平和維持軍」の重包囲の中で強圧的に沈黙を強いられているPLO拒否戦線派の発言を、何んとしてでも押え込み、拒否戦線派の不在のPNCで思惑通りの決議を引き出そうとする、文字通り革命派圧殺・反革命の最たるものである。何故ならば、この拒否戦線派の主張こそがパレスチナ人民の現実を鋭く反映する真実であり、ひいては全アラブの、全世界の労働者階級、プロレタリア人民の階級的要求すなわち革命の真実の主張であるからである。であるからこそ、PFLP、PFLP・GC、ALFなどの拒否戦

線派に対する兇暴な弾圧が行使されているのである。

PFLPの革命路線

我々はこのマルクス・レーニン主義を堅持し、反資本、反帝、反シオニズムのパレスチナ解放を、プロ独樹立・社会主義実現のパレスチナ革命、アラブ革命、プロレタリア世界革命の戦略・戦術で闘い抜き、不倒不屈のプロレタリア精神で持久的ゲリラ戦を展開する、プロレタリア国際主義で武装して闘うPFLPの路線を断固として支持し、互に共働してプロレタリア世界革命を闘う同志的結合を追求する立場から、PFLPの路線を日帝国内の不可視の戦士諸君に紹介し、プロレタリア国際連帯の陣型を打ち築くべく以下展開していきたいと考える。

PFLP・パレスチナ解放人民戦線・人民協議会の第三回大会（七二年三月）の声明を一部引用してPFLPの路線を明らかにする。

PFLP・人民協議会は次の問題に対して適切な考慮をした。

(1) パレスチナ被占領地区内におけるPFLPの組織。そして、こうした段階でのイスラエル側の計画と対抗する場合において、その立脚点を確固たるものにし、そしてその有効性をエスカレートさせることを保証す

るような、組織的、政治的綱領の問題。

(2) 我々パレスチナ人民大衆の大部分を捕え、敵対帝国主義者・シオニスト・反動派との戦闘における戦闘力をマヒさせてきたヨルダン反動政権に対する戦闘。協議会は、この政権と抗争する上での、そしてヨルダン

IIパレスチナ民族戦線をならぬレジスタンスと連帯して打倒する上でのヨルダン民族運動の役割りの問題。

(3) パレスチナ被占領地区とヨルダンの外部でのレジスタンス、そしてそれらの最終的潰滅とアラブ人民大衆からの分離を企てたイスラエル・帝国主義者・反動派の策動。それは丁度レジスタンスを制御し、それから革命的内容を抜きとるために、そしてそのようなレジスタンスの内部に投降と宥和の傾向を持ちこむために、降伏者ブルジョワ政権によって図られた策動に似かよっている。

(4) パレスチナ人民の闘いを清算し投降させるための計画、そして特に、アラブ人民大衆の主張を一掃し、運動のすべてに打撃を加える手段としてのこれらの計画をねっている米帝の位置、そしてそれは、アラブ地域のいかなる存在をも除去し、一九五〇年代初頭の帝国主義制圧下の状況を再構築し、反帝国主義の我々の国家的な連帯に打撃を加えようとする計画の問題。

PFLPはこうした降伏者のふるまいを拒絶し、非難し、長期間に渡る人民解放革命戦争を解放の唯一の道であるとして、その戦略への忠誠を確認する。同じようにPFLPは「パレスチナ国家」のためのすべての計画を、解放という我々の正当な主張を最終的に清算するものであると考え、それを拒絶する。

この新たな局面と関連した闘いを伴う困難で錯綜した状況に直面して、協議会は次のような内容を記録として留めた。

(1) 中心的な問題としての組織的問題に対する考慮。新たな局面は、PFLPの組織的構造を、マルクス・レーニン主義の原理と組織上のマルクス・レーニン主義的な科学的前提に依った革命的組織に変換することを要求している。マルクス・レーニン主義党建設のため

の科学的な前提は、今やパレスチナ革命の中心である。(2) 来るべき局面において、大衆の運動によって導かれる汎パレスチナ民族戦線、例えばヨルダンにおける反動体制に対して明らかに急進的な位置をとっている部隊との政治綱領上での同意、また敵による清算と投降のための目論見を暴露することの必要性、パレスチナ国家案とそれに対する明白で決定的な拒絶、等の同

意の枠内にもとづくヨルダンパレスチナ民族戦線のよる汎パレスチナ民族戦線の建設においてイニシアチブをとる用意が、PFLPには充分あり、そして実際にPFLPはそうすることがPFLPの基本的任務の一つであると考えている。

(3) 大衆のみが抵抗運動の、それが現在おかれている危機的状況を突破し持続する力を持っている。こうした大衆の政治的そして軍事的闘争を通じての動員は、来るべき時代においては最も重要な任務のうちの一つである。PFLPは作戦のすべての方法を、それらの方法を通して、大衆の最終目標のために常に大衆の真只中にあるように考慮する。

(4) 革命的暴力の路線は、敵の陣営との抗争の基本的な路線としてある。革命的暴力の我々による実践は大衆によって遂行される汎汎な闘いに榮譽を授けるであろうし、またそのことによって我々の革命的暴力の実践は大衆の汎汎な闘いの代用物ではなくなるであろう。

(5) パレスチナ革命の全体としての未来は、アラブ人民の運動とアラブ民族解放運動の積み重ねと密接なつながりを持っている。帝国主義に反対する汎アラブ民族戦線建設への結果は、来るべき時代での我々の主な任務の一つになるだろう。

(6) 我々の全世界レベルでの革命的連帯すなわち、すべての社会主義国と、民族解放運動と革命勢力と結びつき、国際的な連帯を強化することによって、我々は帝国主義陣営と、プロレタリア人民の運動に打撃を加えんとするあらゆる目論見と対決することができるだろう。

(中略)

PFLPの第三回人民協議会は、パレスチナ被占領地区とヨルダンにおける我が勇敢あるパレスチナ人民大衆の闘争に敬意を表する。敵イスラエルや反動に捕われの身となつている我が決然たる同志、そしてガザ回廊地区、ヨルダン川西岸、一九四九年以来の被占領地域やヨルダンの、PFLPの支部で断固とした闘いを継続しているすべての同志達、幹部や指導者達に敬意を表する。

PFLP第三回人民協議会は、我々の偉大なアラブ祖国のあらゆる地域におけるアラブ革命のすべての分野で活動する人々に敬意を表する。

我々は英雄的なベトナム人民の闘い、そして西南アジア人民の闘争、さらにアジア、アフリカ、ラテンアメリカのあらゆる地域の闘争に敬意を表する。

我々はパレスチナ革命とPFLPがあらゆる民族的な、そして革命的な勢力から受けている適切な支援に、そし

て特に偉大な社会主義勢力の支援に敬意を表する。我々を支援してくれる勢力と我々との関係は、このような時期にあっては「必要な時に助けてくれる友こそ真の友」ということわざどおりである。

PFLPは第三回人民大会を通じて、我がパレスチナ人民、アラブ人民、そしてアラブ、全世界の革命勢力に対して、闘うすべての人民からの評価に恥じない活動を展開することを誓う。すなわち、あらゆる世界革命勢力の相互信頼の上に成り立つ革命勢力として、勝利の日まで闘い続けることを宣誓する。

パレスチナ解放人民戦線議長
ジョージ・ハバシュ

パレスチナ革命と世界革命統一戦線

この引用で明らかのように、PFLPの戦術・戦術はパレスチナ・アラブ革命を持久的な革命戦争として、非妥協・不退転に広く人民と結合し闘い抜くマルクス・レーニン主義で組織された共産主義建設・世界革命をめざす部隊である。

「革命の当面の目標は、パレスチナ全域における人種的・宗教的偏見のないただ一つの自由で民主的な国家の建設である。

我々の革命は民族主義的なものではなく、偏見を持つ者や敵が主張するように、ユダヤ人を海へ追い落とす意図を持っていない。我々の革命は、この地域において根底的で革命的な変革をなし遂げようとするすべての利害における真の連帯を求めて、イスラエルを含むすべての抑圧と迫害に對し闘うものである。

革命の戦略的目標は、アラブや世界中の進歩的運動と結びついた平和で民主的な国家にある。我々の目標は決して帝国主義の侵略基地としてのイスラエルを認めるうえで建てられるパレスチナ国家ではない。」

「我々がパレスチナ外部の敵、シオニスト、反動、帝国主義者に対して軍事行動を行った際に、そのような行動の結果はPFLPに限定されるものではなく、パレスチナ中のレジスタンス運動と、世界中、あるいはアラブ諸国における民族解放運動にとつて影響を与えることができる。

「このような行動上の路線は、我々の革命的行動の基本的戦略路線と密接に結びついているということに我々は確信を持っている。この路線は革命党、汎パレスチナ民族戦線、アラブにおける支持者、国際的な支持者の建設と、独自に大衆運動を動かし、指導する国際戦線の創出に役立つはずである。

我々の世界革命戦線は我々にとって非常に基本的なこと

である。そして我々は反帝国主義世界革命戦線の重要な構成部隊となることなくして、イスラエル、帝国主義、シオニズム、そして反動派を越えて、あえて社会主義国家の建設者となる能力をもつことは出来ない。」

この一連のPFLP議長ジョージ・ハバシュの発言によって、我々はPFLPの戦術・戦術の正しさを認識することが出来る。

PLO右派のブルジョワ民族主義、改良主義、清算主義、経済主義と対決する、汎パレスチナ民族戦線の現在のな結実が、PLO拒否戦線派として結集されているのである。

シオニストの侵略反革命強盗国家イスラエルを認めることを拒否し、それとの交渉を拒否する。そして、パレスチナ・アラブ革命の武装解除を意味する「ミニ・パレスチナ国家」建設を拒否する、このPLO拒否戦線、PFLP、PFLP・GC、ALFの革命路線を我々は、プロレタリア世界革命を、マルクス・レーニン主義に導かれ、プロレタリア国際主義で武装して闘う共働の同志として断々固として支持し連帯する。

労働者階級の友人達、プロレタリア人民の同志達、そして、不可視の戦士諸君、我々は反資本、反帝、反社帝、反シオニズムの立場から、現下帝国主義と社会帝国主義、シオニズムとアラブ反動派の総がかりの侵略反革命に對し、

断固として革命戦争を堅持しているPLO拒否戦線派の闘いに連帯し共働することを宣言する。

プロレタリア世界革命統一戦線の構築は、口先や字面の「革命性」とは無縁である。我々は共通の敵と闘っている。帝国主義、社会帝国主義、シオニズム、反動派と闘っているのである。

我々には唯一の言葉がある、敵に我々の存在を教えてやる唯一の言葉は暴力がある。

「抑圧される人民の言葉は武器であり、最大最良の組織宣言は武装闘争である」

一九七二年六月八日に、日本赤軍のリッダ銃撃戦の報復としてシオニストのテロによりベイルートにおいて爆死したPFLPの政治局員であるガッサン・カナファニの揚言が、力強く我々の頭上にある。

オリオンの星となった同志奥平、同志安田の革命への不
断の献身性と共に。

△付・PNC・PLO政治綱領▽

この一九七四年六月のPNC第二二回大会で決定された綱領は、PFLP、PFLP・GCなどの革命派の主張がパレスチナ人民大衆の意志の反映としてあることの反映である。現下のPLO右派の策動はこの綱領に対する敵対である。強行しようとしているPNC開催の中でこの綱領を

清算主義的に修正しようとする動きすらあるのである。

PLO 政治綱領

一九七四年六月一日から九日まで、カイロで開催された第二二回大会中にPNCによって承認された。

PNCとPLOによる政治綱領は、地域における恒久的平和はパレスチナ人民に彼らのあらゆる権利を与えることなしには確立しえないという充分に根拠ある確信から、一九七三年一月の第一一回大会のPNCにおいて成立した。

我々の権利を奪還すること、その民族的国家の全ての自決権を奪還することなどに基づいて、先大会と今大会の期間中に起った政治状況総体を検討した後に、PNCは以下の決定を下した。

1、我々人民の民族的権利を抹殺したり、パレスチナ問題を難民問題としてしか考慮しない国連安保理二四二決議に対してPLOは次のような態度表明を行う。

PLOはそのような決議を基礎とするかぎり、ジュネーブ会議を含む国際レベルの、またアラブレベルにおいても全ての交渉を拒否する。

2、PLOは土地を解放し、解放されたパレスチナ全土に人民の独立した民族的権力体を樹立するために、武装闘争を含むあらゆる手段で闘う。

3、PLOは和平調停および、パレスチナ人民の権利、彼らの土地、自決権の行使などを奪取する△安全な国境▽を承認する代償としての、全てのパレスチナ国家案に断固反対する。

4、PLOは解放の為のいかなる段階も、先のPNC決定において承認された自由パレスチナ国家計画を実現する戦略の一段階として考える。

5、PLOはヨルダンにおける独立した民族的権力体の樹立を目的とする、ヨルダン・パレスチナ民族戦線を設立するために、ヨルダン民族勢力と共に闘うであろうし、その闘いの結果としてイメージするパレスチナ国家に協力し統合する。

6、PLOは両人民(ヨルダン・パレスチナ)とこの綱領の下に結集する全てのアラブ解放運動勢力との間に革命的な統一を勝ち取る。

7、この綱領によってPLOは民族的統一を強化するために闘い、あらゆる任務と民族的使命を完全に完遂することを可能にするための目的に達するよう提案する。

8、パレスチナ民族権力体は、アラブ全体にわたる統一の第一歩としてパレスチナ全土の解放のために闘い、アラブ諸国の全戦線の統一樹立を追求して闘う。

9、PLOはまた、社会主義国および諸戦線と共にあらゆる反動勢力、帝国主義者、シオニストの策謀を阻止する進歩主義者との連帯を強化するよう闘い続ける。

10、革命的指導部はその目的を実現するために役立つ戦術を創出する。

執行委員会はこの綱領を適用しパレスチナ民族の未来に問題が生ずるような必然的状況の変化のある場合にはPNCは臨時大会を招集する。

プロレタリア世界革命派の進撃

PNC第二三回大会は、アサド反動のシリア軍II「アラ

「平和維持軍」の拒否戦線派に対する重包囲の压制下にあって、開催された。PLO右派はシリア軍の銃剣に守られながら特別機でカイロへ送り込まれ、代議員定数を満たすためにありとあらゆる策謀をめぐらし、まさしく革命派圧殺の反動性もあらわに「中東和平」ジュネーブ会議開催の一翼を荷いきり、帝国主義の延命と反動派の勢力拡大のフンドシかつぎの役割りを果たしきった。

にもかかわらず、PNC第一三回大会に全中東地域から万難を排して結集したPFLPを中心とする拒否戦線派の組織力、政治力は、右派の喝と暗殺の白色テロに屈せず革命派代議員のオルグを勝利的に勝ち取ったのである。

この極めて困難な、まさしく生命を賭した拒否戦線派の活動は、プロレタリア革命派の革命に対する偉大な献身性の不断の表われであり、マルクス・レーニン主義によって強固に組織された前衛としての確信にもとづく展開である。

第一二回決議（一九七四年六月）に於る、対ヨルダン関係の右転回を計ること、シオニストイスラエルの存在を認定しうえでジュネーブ会議「中東和平」へと歯車のメを修正しようとしてかかっていたPLO右派、すなわちアルファタ、PDFLP、アルサイカ一派の反革命策動は、このPFLP、PFLP・GC、ALFの革命実践の大衆的展開の前にもろくもくずれ去り、PNC大会史上最大

の困い込み的動員を計ったにもかかわらずその反動反革命路線は大衆的に粉砕されたのである。

PNC第一三回大会に結集した先進的なそして大衆的な代議員の多くを組織した拒否戦線の革命路線のバレスチナ革命の展望の水準の正当性は、帝国主義とシオニズム、反動派との明確なそして組織的な対決なしにはバレスチナアラブの解放は決してありえないとする根底的な認識の問題の決定的な正確な理解であり、まさしく階級性の根源からの支配と抑圧に抗する精神を正しく組織するマルクス・レーニン主義の科学的な成果である。

我々は、この拒否戦線の運動の不断の営為こそがまさしく革命の実践であり、大衆の組織原則であり、マルクス・レーニン主義によるプロレタリア世界革命の路線が、抑圧される人民にとつての唯一の真実であることの証査であると考えられる。このPFLPバレスチナ解放人民戦線に代表されるバレスチナアラブの革命戦線を断々固として支持し、共通の敵を打倒すべく共に進撃せんことを、我々はこの全存在を賭けてオリオンの星に誓う。

PNC第一三回大会は、第一二回大会の精神すなわち、バレスチナ革命アラブ革命の主題を消し去ろうとする潮流と、その精神を前進させようとする革命派の闘争であったのであり、結果的には、ヨルダンとの連邦ミニ・パレ

スチナ建国策動の破産である。

PLO右派反動派は、議案提起すらしえずに、大衆的にその反革命性を問われたのであり、エジプト、シリア、そしてサウジ反動の走狗以外の何物でもないことを暴露されたのである。このバレスチナ大衆の利益をいささかも代表しえぬPLO右派の売弁官僚アラファト、カドゥミー派の目論見は、PNC開催の主導権を握り、ヨルダン反動フェインのCIA政治の中で徹底した革命派の武装解除を強行する企てであった訳だが、その意図こそが汎アラブ革命から世界革命を展望するPFLPを先頭とする拒否戦線派に対する全アラブの、いや全世界の帝国主義者、ブルジョワ民族主義者共のまさしく恐怖の反映であったのである。拒否戦線派は、反動派の目論見を打ち砕いた。そして正しく革命派を組織しつつある。

資本主義を批判し、帝国主義に反対する全世界の武装して闘う人民の軍隊の国境を越えた連帯を築きあげ、社会主義建設の偉大な前進を任務とする拒否戦線派と共に、我々は、マルクス・レーニン主義の実践と、マルクス・レーニン主義による組織者として、プロレタリア国際主義の旗を高く掲げ、労働者階級・プロレタリア人民の共同の敵、資本主義・帝国主義・反動派の根底的な打倒を戦取し、プロレタリア独裁・社会主義革命の路線を断々固として押し進

め、闘い抜く決意である。

我々は現実的かつ具体的かつ効果的な戦術を広く人民の闘いの歴史に学び、より直接的に敵に打撃をあたえるべく戦闘力を行使する。我々はこの全存在を賭けて東アジア地域に於る反帝国主義路線の一翼を担い、バレスチナアラブ、北アメリカ、南アメリカ、ヨーロッパ地域の、全世界の武装革命勢力、社会主義勢力、共産主義によって組織される人民の軍隊と結びつき、共同共通の敵を打倒すべく持久的恒常的な戦闘を組織する。

我々の戦闘力は革命的暴力の不断の行使であり、一切のブルジョワ道徳律とは無縁である。我々はブルジョワジーの死刑執行人であり、墓掘人である。我々は断固としてブルジョワジーを抑圧する、断固として擯取する。そして、断々固としてその根底的な死を戦取する者である。

同志諸君、労働者階級プロレタリアートの兄弟達、そして、東アジア諸地域の不可視の戦士諸君、我々は戦闘を開始する。我々は常に諸君と共にある。共に進撃しようではないか、共に勝利しようではないか。

マルクス・レーニン主義に導びかれプロレタリア国際主義で武装して闘う路線、すなわち反帝・反社帝のプロレタリア世界革命への大道が我々の進路である。

— 全世界的に進行する帝国主義ブルジョワジーの権力再編策動を鋭く見すえ、資本主義・帝国主義の体制的危機¹¹構造的危機を労働者階級プロレタリア人民の革命的好機へと転化せしめ、マルクス・レーニン主義の旗の下に反資本・反帝・反社帝・反シオニズムの世界共産主義革命の戦線に結集し、世界革命の利益を一国的利益に優先させ、世界革命戦線創出の急務を自己党派の利益ではなく、革命の利益として集中し、プロレタリア国際主義で武装し全世界のプロレタリア人民の革命の軍隊と戦闘的に結合し、世界革命統一戦線の建設を戦取し、プロ独樹立・社会主義実現・世界共産主義革命へ向けた非妥協不退転の闘いを永続的¹²非和解的に闘い抜く、すなわち、我々は拒否戦線である。

— 我々は進撃する、そして必ずや勝利する。

スローガン

帝国主義打倒！

社会帝国主義打倒！

国際シオニズム打倒！

マルクス・レーニン主義、毛沢東思想万才！

プロレタリア階級独裁 社会主義革命勝利！

プロレタリア国際主義の旗の下

万国の労働者被抑圧民族は団結せよ！

中東和平策動—ミニ・パレスチナ国家案粉碎！

シオニスト・イスラエル打倒！

パレスチナ・アラブ革命勝利！

PFLPを先頭とする拒否戦線の進撃万才！

編集・発行 拒否戦線 1977.7.20 500円